

無門慧開の生涯と『無門関』（一）

——杭州天龍寺から月林師観のもとへ——

佐藤 秀孝

はじめに

南宋後期を代表する宋朝禪者のひとりに臨済宗楊岐派の無門慧開（仏眼禪師、一一八三—一二六〇）という人が存しており、慧開といえは古則公案を拈提した『無門関』の評唱者として広く知られている。およそ禪学に僅かでも関心を寄せたり、臨済宗や曹洞宗の寺院に参禅経験が存する人であれば、頌古評唱集として名高い『無門関』という禪籍について相応の知識を得ているはずであり、それほどに『無門関』という禪籍は一般にも親しまれている。

古来より『無門関』は日本の禪宗界でとりわけ珍重されており、『無門関』に関する専門書や提唱本なども数多く出版されている。近年の現代語訳と語彙解説の成果としても「禪の語録シリーズ」の平田高士（精耕）訳註の『無門関』（筑摩書房、一九六九年刊）が存し、西谷啓治・柳田聖山編『禪家語録Ⅱ』（筑摩書房「世界古典文学全集」に所収）にも同じく平田精耕訳註「無門関」が収められている。また中尾良信編『無門関（禪籍善本古注集成）』（名著普及会、一九八三年九月）には『無門関』に関する著名な注釈書が影印のかたちで一冊に収められている。研究成果としては石井修道「『無門関』の成立・伝播・性格をめぐって」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要』人間文化 第一六号、二〇〇一年九月）と題する講演報告もまとめられており、『無門関』の書誌と内容について多くの貴重な示唆を与えている。

ところで、実際に『無門関』に関する書籍類の「解題」などを概観閲覧して気づくのは、その多くは『無門関』の書誌と内容（禅思想）を考察するのが中心であって、頌賛と評唱をなした無門慧開その人の事跡に關しては存外に等閑に扱われており、これまで慧開その人の人物像を詳細に論じた論考が少ないことであろう。もちろん『無門関』各則の古則公案としての内容・

位置づけや慧開の評唱した内容こそが重要な関心の的であり、頌古の頌賛提唱者である慧開が如何なる人生を送ったのか、その細かな足跡など大して問題ではないといった見方も存するであろう。しかしながら、仮にも「不立文字、教外別伝」を標榜する禪家において一つの禅籍が世に送り出されるためには、撰者ないし提唱者あるいは編者の並々ならぬ修行時代の研鑽学道の日々があり、その後の住持期に行なってきた学人接化の後半生が存しているのであって、慧開という人物の生涯を抜きにして『無門関』を語ることができないであろう。

本稿ではそうした視点に立つて無門慧開という人が如何なる生涯を送った禅者であったのか、彼の人生を『無門関』との関わりから逐一に探ってみることにしたい。慧開は修行時代にどのような参禅学道をなしていたのか、彼が悟道した機縁とは如何なるものであったのか、諸山歴住期には如何なる学人接化を行なっていたのか、慧開の一生涯の節々で『無門関』がどのように位置づけられていたのか、さらに日本から入宋求法した無本覚心（心地房、法燈円明国師、一二〇七—一二九八）が慧開の法を嗣いだ経緯は如何なる因縁に依るものであったのか、帰国する覚心に対して慧開はなぜ『無門関』を付与したのか、慧開が最晩年に海を隔てて日本の覚心と書簡のやり取りをなしたのは何故なのか、覚心にとって『無門関』は如何なる意味を持っていたのか、中世後期において法燈派の禅者が『無門関』とどのように関わったのか、などといったおよそ無門慧開を取り巻く諸般の状況について、限られた史料の中からではあるが、詳細に検討を試みることにしたい。

無門慧開に至る臨済宗楊岐派の流れ

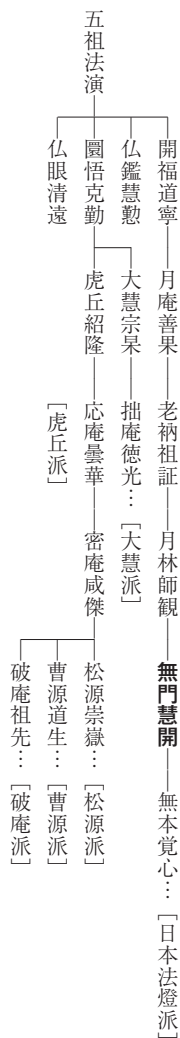
そもそも臨済宗は唐末に南嶽下の臨済義玄（慧照禅師、？—八六六または？—八六七）を派祖として形成展開した中国禅宗五家の一派であり、同じく青原下の洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）と曹山本寂（元証大師、八四〇—九〇二）に始まる曹洞宗とともに後代へと継承され、臨済・曹洞の両系統は禅宗の二大動脈として現今にまで連綿としてつづいている。しかしながら、実際に臨済宗という宗団が大きく台頭してくるのは北宋代に至って以降のことであり、とくに黄龍派と楊岐派の二派に分かれてからといってよい。北宋中期に臨済下第七世の石霜楚円（慈明禅師、九八六—一〇三九）のもとから黄龍慧南（普觉禅師、一〇〇二—一〇六九）と楊岐方会（九九二—一〇四九）が輩出し、これより臨済宗は大きく黄龍派と楊岐派に分かれて展開している。とくに慧南は洪州（江西省）隆興府の黄龍山崇恩禅寺を中心に活動して多くの門人を育成し、慧南を派祖とする黄龍派は北宋

後期に青原下の雲門宗とともに門流が繁栄隆盛して一大勢力を形成していた。一方、同じ楚円に法を嗣いだ楊岐方会の門流も遅れて北宋末期の頃から徐々に勢力を伸ばしており、楊岐派として一派を形成し始めている。

これが南宋代に入ると状況はさらに一変し、黄龍派や雲門宗の勢いは急速に衰退へと向かつており、黄龍派の法脈は辛うじて入宋求法した明庵榮西（千光法師、一一四一—一二二五）によつて日本に伝来され、日本の黄龍派（千光派）として日本中世禅林に一勢力をなしている。これに対して江南禅林では黄龍派に代わつて五祖法演（東山、？—一一〇四）の活動を契機として楊岐派にしだいに人材が輩出するようになり、五祖門下の三仏の時代を経て楊岐派の興隆が磐石なものへと向かい、後世へと継承されていく。その中心となったのは圓悟克勤（仏果禪師、一〇六三—一一三五）の高弟である大慧宗杲（妙喜、大慧普覺禪師、一〇八九—一二六三）を派祖とする大慧派であり、宗杲は古則公案の参究を主に置く看話禅を標榜して一大勢力を形成している。また大慧派に遅れて同じく克勤の法を嗣いだ虎丘紹隆（瞌睡虎、一〇七七—一一三六）を源流とする虎丘派もしだいに人材を育成打出するようになり、南宋後期には密庵咸傑（中峰、一一八一—一二八六）のもとから大きく松源崇嶽（老曠翁、一二三一—一二〇二）を派祖とする松源派と、曹源道生（？—一九七）を派祖とする曹源派と、破庵祖先（一一三六—一二二一）を派祖とする破庵派という三系統に別れてそれぞれ展開しており、とくに松源派と破庵派は大慧派と拮抗する勢力へと拡大している。このように楊岐派は大慧派と虎丘派の二系統が大きく展開し、後代の中国禅林へと受け継がれていくのであり、とくに虎丘派下の松源派と破庵派は多くの入宋・入元僧や渡来僧らの活動によつて日本の地に盛んに導入され、その後の日本中世禅林の発展に絶大な影響を与えている。一方、青原下では雲門宗に代わつて南宋代になると曹洞宗が真歇清了（寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五二）や宏智正覺（宏智禪師、隰州古仏、一〇九一—一一五七）らの活動によつて綿々と維持され、坐禅を中核とする黙照禅を唱導して江南禅林に一勢力を保持している。曹洞の流れも入宋求法した永平道元（仏法房、一二〇〇—一二五三）により日本禅林に導入され、やがて瑩山紹瑾（仏慈禪師、一二六四—一三三五）の活動を経て日本の曹洞宗として形成展開している。とりわけ、日本中世禅林においては無本覚心の門流である法燈派が瑩山下の曹洞宗と関わりを密にして展開しており、その影響によつてか中世曹洞宗においても『無門関』は重要な禅籍として受容されている。

ここに取り上げる無門慧開という人は、南宋後期に活躍した楊岐派の臨濟禅者であるが、後に示すごとく黄龍慧南ないし黄龍派の古道場であつた洪州の黄龍山崇恩寺に二度にわたつて住持している点が特筆されよう。慧開は大慧宗杲や虎丘紹隆らと

同じ楊岐派の流れに属しているが、大慧派や虎丘派といった主流派ではなく、いわば傍系に当たっている。慧開は五祖法演の高弟のひとり開福道寧（寧道者、一〇五三—一一一三）の流れを酌んでおり、法演から慧開に至る楊岐派の系譜を五祖門下の三仏および大慧派・虎丘派の両主流派の源流とともに示すならば、およそつぎのようになる。



このように慧開は『碧巖録』の評唱者である圓悟克勤と同門に当たる開福道寧の法系上の遠孫に当たっており、道寧より月庵善果（一〇七九—一一五二）さらに老衲祖証を経て慧開の本師である月林師觀に至っている。ちなみに五祖門下の三仏のひとり龍門清遠（仏眼禪師、一〇六七—一二二〇）も慧開より先に同じ仏眼禪師という勅諡号を宋室より賜っている。禪宗燈史や宗派図などで見る限り、慧開の系統は元代に法孫の代で中国江南禪林からその法燈を絶っているが、幸いに入宋求法した日本僧の無本覺心が慧開の法を嗣いで帰国し、鎌倉後期に紀伊（和歌山県）由良の鷲峰山西方興國禪寺を中心に活躍して門流が日本禪宗の一角を形成しており、日本中世後期に法燈派（由良門徒）と称されて展開し、中世の日本禪林に五山派あるいは林下として一勢力をなしている。

冒頭に触れたごとく無門慧開といえは『無門関』一卷を提唱した禪者として広く知られており、とくに『無門関』は鎌倉中期に覺心によって日本に請来され、その後しだいに日本禪林に受容されるようになる。中世後期以降の日本禪林では臨濟宗や曹洞宗の禪者らによって多くの『無門関抄』の類いが作られており、現今においても『無門関』は臨濟僧堂などで広く提唱講読されている。無門慧開の名は知らなくとも、およそ禪宗のことを僅かでも学んだり、禪思想に関心を寄せている人であるならば、その名を聞いて知らぬ者はないほど公案集『無門関』は著名な禪籍として親しまれている。

本稿では限られた史料を通してではあるが、無門慧開という禅者の一代にわたる事跡をその著『無門関』との関わりを踏まえながら詳しく論ぜんとするものである。『無門関』四十八則の本文に關してはすでに多くの書籍や研究論文が存していることから、ここでは古則公案の内容などを具体的に一々に検討するのではなく、あくまで『無門関』の成立過程や編集刊行および重刊などについて慧開自身の足跡を踏まえながら考察するものである。さらに慧開の法を嗣いだ覚心によって『無門関』が日本禅林に請来された経緯などについても、若干ながら論じていくことにしたい。

無門慧開に関する伝記史料

無門慧開に關しては、残念ながら行状や塔銘といった特定の伝記史料の類いが撰述された形跡が見られず、詳細な足跡を辿れないのが実情である。つぎに触れる『無門開和尚語録』の卷末に慧開の伝記史料の類いが付されていたり、日本の覚心が本師慧開の事跡についていくらかでもまとめていてくれたならば、より多くの慧開に關する貴重な情報が得られたはずであり、この点は誠に惜しまれてならない。

禅宗燈史として最初に慧開の章を載せているのは、明代初期に松源派の円極居頂（円庵、？—一四〇四）によって編纂された『統伝燈録』に至つてのことである。『統伝燈録』卷三五に「万寿崇観禪師法嗣」として「黄龍慧開禪師」の章が存しており、

黄龍慧開禪師、字無門。杭州人。作「朝陽補衲偈」曰、寒時急用底物、趁「暖著」些針線、忽然「臘月到来、免」致「脚忙手乱」。（大正藏五・七〇八b—c）

として載るのが初出であるが、すでに慧開が示寂して一世紀半近くを隔てている。本師の名を「万寿崇観禪師」とするのは「万寿師観禪師」と訂正すべきであろうが、慧開の伝記的記事としては出身地が杭州（浙江省）の地であったこと、字を無門と称していたこと、月林師観（崇観）を本師とした嗣法関係、それに洪州の黄龍山に住持した事実を伝えているのみであり、ほかには僅かに慧開作「朝陽補衲」と題する一偈を収めているにすぎず、記載内容はきわめて少ない。

これにつづいて同じく明代初期に大慧派の南石文琇（一三四五—一四一八）によって編纂された『増集統伝燈録』卷二には「万寿月林観禪師法嗣」として「隆興黄龍無門慧開禪師」の章が存しており、

隆興黄龍無門慧開禪師、杭州良渚人、俗姓梁、母宋氏。礼「天龍肱和尚」為「受業師」。参「月林於蘇之万寿」、林令「看」無字話。經「于六年、

迥無_二入_レ処_一。乃奮_二志_一剋責、誓云、若去睡眠、爛_レ却我身。每_二至_二困時_一、廊下行道、以_レ頭向_二露柱_一磕。一日在_二法座_一辺立、忽聞_二齋鼓_一声_一有_レ省。成_レ偈曰、青天白日一声雷、大地羣生眼豁開、万象森羅齊稽首、須彌踣跳舞_二三臺_一。次日入室、欲_レ通_二所得_一。林遽曰、何処見_レ神見_レ鬼了也。師便喝。林亦喝。師又喝。自_レ此機語吻合。嘉定十一年、出_二世安吉報國_一、繼遷_二隆興天寧_一・黃龍・翠巖・蘇之開原・靈巖・鎮江焦山・金陵保寧。淳祐六年、奉_レ旨開_二山護國仁王寺_一。上堂。若人識_二得心_一、大地無_二寸土_一。古人恁麼道、黃龍即不然。若人識_二得心_一、大地尽是土。上堂。是非長短耳、切莫_二於_レ中覓_二異同_一。要_レ得_二八風吹不_レ動、放教_二心_一地等_二虛空_一。慈受老人、只解_二順_レ水張_レ帆、不_レ能_二逆風把_レ舵_一。黃龍又且不_レ然。是非都去了、是非裏薦取。何故。響。幾度黑風翻_二大浪_一、未_二曾聞_レ道_一釣舟傾。上堂。三分光陰_二早過_一、懷州牛喫_レ禾。靈臺一点不_二揩磨_一、益州馬腹脹。貪_レ生逐_二日_一區區去、天下覓_二医人_一。喚不_レ回_二頭_一爭奈何、灸_二猪左膊上_一。於_レ斯薦道、參學事畢。其或未_レ然。拈_二拄杖_一云、請木上座与_二諸人_一說破。卓_二拄杖_一一下。上堂。趙州和尚云、南來者与_レ他下載、北來者与_レ他上載、大似_二世情看_レ冷暖_一人義逐_二中_一高低。慈受和尚云、南來者与_二他一面笑_一、北來者与_二他一面笑_一、大似_二歡喜厮散_一裏有_レ刀。若是焦山、又且不_レ然。南來者以_二平常_一待_レ之、北來者以_二平常_一待_レ之。也不_レ嘆也不_レ笑、也無_レ下也無_レ高。何故。清平世界、不_レ用_二干戈_一。作_二朝陽偈_一曰、寒時急用底物、趁_レ暖著_二些針線_一、忽然臆月到来、免_レ致_二脚忙手乱_一。对_レ月偈曰、始見_二些兒光影_一、要_レ了_二末後一段_一。若是無門拳頭、不_レ打_二這般鈍漢_一。師晚年倦_二於_二槌枓_一、庵_二居西湖之上_一、參學者猶衆。理宗召入_二選德殿_一、說法折_レ雨、隨即感応。勅賜_二金襴法衣_一、仏眼之号、以示_二褒寵_一。（正統藏一四二・三九〇b・d）

とあるごとく記載内容が大幅に増補されている。『増集続伝燈録』では伝記記事や示衆のことが『続伝燈録』に比して格段に増加されており、編集者の文琇が慧開の伝記についても丹念に調べ上げている状況が窺われて興味深い。しかしながら、『増集続伝燈録』においても慧開の示寂年月日や世寿・法臘など基本となる重要事項がなぜか記載されていないため、伝記内容としては不十分なものであって、具体的な年時の確定などが難しい。また『増集続伝燈録』には慧開がなした四回の上堂語と二首の偈頌が載せられており、後段で詳しく触れるごとく、それらはいずれも『無門開和尚語録』から抄出引用されていることが確かめられる。おそらく編者である文琇は宋版または元版の『無門開和尚語録』を実際に閲覧する機会に恵まれ、直接に『無門開和尚語録』の上堂や偈頌の中から記事を選んで『増集続伝燈録』の慧開の章に掲載していると解してよいであろう。この点、慧開の場合のみでなく、文琇は他の禪者に關してもそれぞれの語録や詩文集などから丁寧の上堂語や偈頌その他を引用しており、きわめて好意的な性格であったことが知られる。

この『増集続伝燈録』につづいて、後代の禪宗燈史としても『五燈会元統略』卷三に「杭州黃龍無門慧開禪師」（正統藏一三八・四五三c-d）の章、『五燈嚴統』卷二二に「杭州黃龍無門慧開禪師」（正統藏一三九・四八一c-d）の章が存しているが、いずれも住持地を「杭州黃龍」と誤って記している上に、記事内容はきわめて簡略化されている。さらにその後の禪宗燈史としても『祖燈大統』卷七五に「南昌府黃龍無門慧開禪師」（禪宗全書二一・一五六三頁）の章、『五燈全書』卷五三に「隆興府黃龍無門慧開禪師」（正統藏一四一・八一b-d）の章、『統燈正統』卷七に「南昌府黃龍無門慧開禪師」（正統藏一四四・二八九a-c）の章、『統燈存稿』卷二に「隆興府黃龍無門慧開禪師」（正統藏一四五・三〇a-c）の章、『統指月錄』卷三に「隆興黃龍無門慧開禪師」（正統藏一四三・四一五d・四一六a）の章などが残されているが、これらは概ね『増集続伝燈録』の記事を踏襲あるいは抽出するかたちで要領よくまとめられており、若干の付加を除いていずれも記事内容としては『増集続伝燈録』に載る範疇をほとんど出していない。

一方、高僧伝の類いとしては、明代に呉門華山寺沙門の高松明河（汰如法師）によって編纂された『補統高僧伝』卷一九「感通篇」に「無門開伝」が存しており、

慧開、字無門。杭之良渚人、俗姓梁、母宋氏。礼天龍肱和尚為受業師。聞月林觀公開法於万寿、師同石霜印公往謁之。林令看無字話。六年過無入处。乃奮自剋責、誓云、若去睡眠、爛却我身。每至困劇時、廊下行道、以首触露柱。一日在法座辺立、忽聞齋鼓声、有省。成偈云、青天白日一声雷、大地羣生眼豁開、万象森羅齊稽首、須彌踣跳舞三臺。入室通所得。林叱曰、何得見神見鬼。師便喝。林亦喝。師又喝。自此機語吻合。嘉定間、出世安吉報國、遷隆興天寧。黃龍・翠巖・蘇之開元・靈巖・鎮江焦山・金陵保寧。淳祐間還里、于西湖北山林木幽蔭处、樂而居之。有石自山趾斗折而上、硿硿不合法如礪。師之来其下、劃然出泉、色紺而甘、冽澄若重淵。言者謂、師自黃龍移是山、蓋龍随師錫而帰也。遂呼其石处、為黃龍洞、而峰為黃龍峰。是凡夏雨初霽、有物蜿蜒松上、氣茆茆而黃、其黃龍焉。時境内大旱、少保孟珙・丞相吳潛・鄭清之、奏師道行、致泉湧。龍時現、必能為蒼生救枯槁也。有旨召入文德殿演法。師升座、無所說唯嘿坐。雨止時大作、遠近普洽。上喜甚問、何以致是。師曰、寂然不動、感而遂通。上悅、賜号仏眼禪師、被以金縷伽梨、勅祠黃龍、曰靈濟侯。于黃龍峰下、建護國仁王寺、撥平江官田三千畝、命師開山。師形体矮小、其赴召也。指日觀衆、而後踰闕、施重城於座級而升焉。朝士多竊笑之。師誓弘法教、惟自諱報身不偉。洞之顛有玉峰一片、削成挿天、瑩如脂肪、高二丈餘。因命工肖己形、長丈許、飛雲隱其足。緣背光微蔚

起、鑿^レ龍首蟠^レ、繞^レ右向^レ虛、左竇可^レ俛入^レ、前施案焉。皆就^レ石勢^レ鑿^レ之。幻若^レ從^レ地湧出、而登坐^レ於空中^レ者、私祝云、願後有^レ身視^レ此。師遷化之夕、錢塘孫氏婦、夢^レ一僧篝^レ燈、自称^レ開道人。寄宿、翼日產^レ男子、後為^レ大禪師、即中峰本公也。師法嗣為^レ永嘉見和尚。高峰語^レ石屋云、温有^レ瞎驢^レ是也。亦為^レ大宗匠、不^レ墜^レ家聲^レ者。（^レ正統歲一三四・一五四b-d）

と記されており、やはりそれ相応の伝記記事が載せられている。ただし、慧開の伝は禅僧として「習禅篇」には収められておらず、なぜか神異僧を意味する「感通篇」に載せられている。この点については後に詳しく示すごとく慧開がなした祈雨の事跡に因んだ神異僧としての面がことさら強調されたためであろう。『補統高僧伝』では『増集統伝燈録』のように『無門開和尚語録』から上堂語や偈頌などを引用することはなく、概ね伝記的な記載に限られている。『増集統伝燈録』に載る伝記的な記載と一致している箇所も多いが、『補統高僧伝』のみに独自に伝えられる内容も見られることから、両史料を検討整理することによって慧開の伝記はかなり補完することができよう。

ただ、注目されるのは『増集統伝燈録』『補統高僧伝』ともに慧開の主著である『無門関』に関して何ら触れていない点であって、『増集統伝燈録』『補統高僧伝』が編纂された明代前期の頃にはすでに『無門関』が中国禅林から伝存を絶っていたか、ほとんど顧みられなくなっていたらしい事情も察せられて興味深い。『無門関』は日本禅林でこそ大いに珍重されて広まり、日本禅宗（とくに臨済宗）を特色づける公案集として受容されていたものの、当の中国禅林では慧開が示寂して一世紀半ほどを経て早い時期には失われているようである。¹⁾

明代後期に田汝成（字は叔禾、号は豫陽、一五〇三—一五五七）が編集した杭州西湖の地誌である『西湖遊覧志』巻九「北山勝蹟」にも「祠（胡忠祠）之後、為^レ掃箒塢・黄龍洞・護国仁王禪寺」として、

護国仁王禪寺、宋淳祐間、經畧花園使孟珙建。自^レ其趾斗折而上有^レ洞、豁深杳莫^レ測、水泉紺凜、旱不^レ縮而潦不^レ盈、有^レ龍居焉。故老相伝、曩夏雨初霽時、常有^レ神物蜿蜒臥^レ松上、其氣弗弗然而黃、蓋黄龍也、故世号^レ黄龍洞。珙既建^レ仁王寺、并作^レ龍祠、延^レ高僧慧開^レ居^レ之。属歲又早、理宗召^レ慧開^レ祈^レ雨。退而默坐、帝遣^レ内侍^レ問^レ之。対曰、寂然不^レ動、感而後通。既而大雨。自^レ是無^レ雨輒禱禱輒応。遂封^レ黄龍、為^レ靈霽濟侯^レ賜^レ祠、額曰^レ護国龍祠。元至正燬。洪武初、僧祖吉重建。其東有^レ黄山橋、塢内有^レ天龍庵・永安院・西靖宮、並廢。

と伝えられており、これは後に詳しく触れるごとく慧開と杭州の靈洞山護国仁王禪寺との関わりを述べたものである。²⁾ 清代の

康熙五十七年（一七一八）に刊行された『康熙錢塘県志』卷三〇「積」にも、

慧開。生而藐小。与「石霜」同參、作「補衲」・看經二偈。自「黃龍山」挾レ龍來、止「無門洞簾」。每蛻「軀松上」。禱「雨輒応」。孟珙・呉潜・鄭清之聞「于朝」召、對問下所以致レ兩者上。曰、寂然不レ動、感而遂通。賜「金紋伽梨」。其後身即中峯明本也。

として慧開の記事が載せられている。さわめて簡略な内容であつて『補統高僧伝』の記載を抜粹するかたちで著されているが、「生而藐小」や「其後身即中峯明本也」といった記載は『増集統伝燈録』には見られなかった独自の内容である。また「石霜と同參なり」とある石霜とは、後に詳しく示すがごとく慧開と同門で潭州（湖南省）瀏陽県の石霜山崇勝禪寺に住持した竹巖妙印のことを指しており、『補統高僧伝』では「石霜印公」と記されている。

『武林梵志』卷五「北山分脈」の「護国仁王講寺」の項にも慧開の記事が含まれているが、この点に関しては後段で詳しく触れることにしたい。同じく『武林梵志』卷一〇「古徳機縁」の「護国寺」に「隆興黃龍無門慧開禪師」の項が存しているが、内容はほぼ『増集統伝燈録』の慧開の章と同文である。

一方、日本との関係でとくに重要なのは、無本覚心が在宋中に慧開と交わした問答商量が覚心の伝記史料などによって知られ、また帰国して後に海を挟んで慧開との間で交わした往復書簡に関する史料なども伝えられている点であろう。これらの史料を詳細に紐解くことによって、晩年の慧開をめぐる状況をかなり詳しく辿ることができよう。

『無門開和尚語録』について

幸いなことに無門慧開に関しては頌古集『無門関』一卷が存しており、『無門関』自体も慧開の事跡を知る上で貴重な伝記史料となっていると捉えてよい。慧開による『無門関』の提唱および編纂・刊行については後段で慧開の伝記と絡めて論ずることにはしたい。しかも慧開には『無門関』のほかに生前の上堂・小參その他をまとめた語録として『無門開和尚語録』が伝えられており、この『無門開和尚語録』には慧開が具体的に説示した日々のことばが収録されている。『無門開和尚語録』は生前に慧開が門下を集った修行僧や在俗の徒に対して実際に語ったことばが散りばめられている点で、さわめて貴重な第一等の文献史料でもある。

幸いに覆元五山版『無門開和尚語録』不分卷一冊が宮内庁書陵部や建仁寺兩足院に所蔵されており、しかも椎名宏雄編『五

山版中国禅籍叢刊〈第七巻語録2〉（二〇一三年一月、臨川書店刊）に『無門語録』としてこの宮内庁書陵部所蔵本の影印が出版・公刊された意義は大きいであろう。一方、江戸期にも元禄版として再刊本も作られており、これは元禄五年（一六九二）に『無門開和尚語録』二巻として再編刊行されたもので、曹洞宗明峯派の卍山道白（復古老人、一六三六—一七一五）の跋文が末尾に収められている。駒澤大学図書館には元禄五年に京都銅駝坊書肆勸道軒・江戸村上源兵衛によって刊行された『無門開和尚語録』二巻一冊（駒・忽一一五）と、元禄一〇年（一六九七）に林五郎兵衛によって重刊された『無門開和尚語録』二巻二冊（駒一二四—九六）が所蔵されている。元禄五年刊本には末尾に「元禄五壬申曆孟冬吉日寿梓、雒陽銅駝坊書肆勸道軒、江戸日本橋南一丁目村上源兵衛」という刊記が存し、これにつづいて卍山道白の跋が収められている。一方、元禄一〇年重刊本では、元禄五年本の刊記に代わって「元禄十年九月吉祥、林五郎兵衛梓行」という刊記が見られる上に、若干の配列の異同が認められる。はじめに現存する五山版『無門開和尚語録』と元禄五年本『無門開和尚語録』の配列を載せておきたい。上段が覆元五山版『無門開和尚語録』一巻一冊の編成であり、下段が元禄五年版『無門開和尚語録』二巻一冊の編成である。

〔覆元五山版『無門開和尚語録』一巻一冊の配列〕

眉山程公許序 淳祐九年季春

無門開和尚住湖州報因禪寺語録 侍者普敬録

隆興府天寧禪寺語録 侍者普通録

隆興府黄龍崇恩禪寺語録 侍者普通録

平江府靈巖顯親崇報禪寺語録 侍者了心録

隆興府翠巖広化禪寺語録 侍者普禮録

再住黄龍禪寺語録 侍者法孜録

鎮江府焦山普濟禪寺語録 侍者普岩録

平江府開元禪寺語録 侍者普覺録

建康府保寧禪寺語録 侍者光祖録

開山護国仁王禪寺語録 侍者一見録

〔元禄五年版『無門開和尚語録』二巻一冊の配列〕

眉山程公許序 淳祐九年季春

無門開和尚語録卷上

無門開和尚住湖州報因禪寺語録 侍者普敬録

隆興府天寧禪寺語録 侍者普通録

隆興府黄龍崇恩禪寺語録 侍者普通録

平江府靈巖顯親崇報禪寺語録 侍者了心録

隆興府翠巖広化禪寺語録 侍者普禮録

再住黄龍禪寺語録 侍者法孜録

鎮江府焦山普濟禪寺語録 侍者普覺録

平江府開元禪寺語録 侍者普岩録

建康府保寧禪寺語録 侍者光祖録

告香普説・小參・贊仏祖・偈頌・真贊

刊記 至元十六年中秋

無門慧開遷化関連記事

開山護国仁王禪寺語録 侍者一見録

無門開和尚語録卷下

告香普説・小參・贊仏祖・偈頌・真贊

刊記 至元十六年中秋

無門慧開遷化関連記事

刊記 元禄五年孟冬

卍山道白跋 元禄五年春

このように覆元五山版『無門開和尚語録』が一卷一冊本であつたのに対して、元禄版『無門開和尚語録』は二卷一冊本として再編成されており、卍山道白が元禄五年春に書いた跋文を付して刊行されている。もともと元禄一〇年重刊本においては表題が「無門慧開禪師語録」となっており、上下二卷二冊に分けられている。しかも冒頭の「眉山程公許序」が巻下の後半に回されており、林五郎兵衛の刊記の後に「眉山程公許序」が存し、最後に卍山道白の跋文が付されるという体裁になっている。覆元五山版と二種の元禄本の序跋や刊記などを整理すると、少なくとも『無門開和尚語録』は五回ほど刊行されているものらしく、淳祐版（宋版）・至元版（元版）・五山版（覆元版）・元禄五年刊本（江戸版）・元禄一〇年刊本（江戸重刊本）が存していたことが分かり、この内で覆元五山版刊本と元禄五年刊本と元禄一〇年重刊本という三種が現今に伝存しているわけである。

最初に宋版『無門開和尚語録』一卷が南宋の淳祐九年（一二四九）季春三月に程公許の序文を得て刊行されていたものと見られ、これは慧開の生前六七歳のときに当たっている。ついで南宋が壊滅した年に当たる元の至元一六年（南宋の祥興二年、一二七九）八月一五日（中秋）の刊記が存することから、慧開が示寂して二〇年目に当たる年に慧開の門人や在俗の信徒らによって元版『無門開和尚語録』として再刊されたことが知られる。ただし、元版は宋版のままに復刻され、末尾に慧開遷化に關連する記事が付加されているにすぎない。宋版『無門開和尚語録』は無本覚心が帰国する際に日本禅林に請求した可能性も高いものの、少なくとも宮内庁書陵部に所蔵される五山版『無門開和尚語録』は、宋版ではなく元版をそのまま復刻した五山版『無門開和尚語録』として現存しているわけである。しかも五山版には新たな刊記などは見られず、あくまで元版を忠実に模刻した覆元五山版であり、内容的には元版と何ら区別がつかず、日本禅林で新たに付加された記事は認められない。

一方、元禄五年版と元禄一〇年版の『無門開和尚語録』巻末には、再刊に関わった卍山道白が跋文を寄せている。⁽⁶⁾

碧巖集之後、評唱公案甚多。而不墮解路、發明宗旨者、独無門開公乎。予曾閱無門関四十八則、知其然矣。今又得此諸會語、遮我睡餘之眼、則降子為之活動、巖電為之閃爍。蓋以其痛快、破寂如雷驚蟄也。而無味之談、如砒霜、如狼毒。是故無人能下舌頭、宜乎。此録久絶流行。或云、今也宗風日起、不乏其人、若下疏決手、試令翻刻、不但開公法身之設利羅重放、不朽之大光明、抑亦有知毒用者、必能瘳瞑眩疾。其久絶流行者、原泉之盈科也。既盈而後進、今正其時也。予聞緒言而喜、乃乾竹絞汁、瀝這些二滴、擲一擲授印生、以下一任落乎江湖、放乎四海。若有入道千里烏騾追不得、則幸也。

元禄五年壬申春日、宝陀峰卍山撰。^(卍山道白之印)（正統藏一二〇・二六四c）

これによれば、道白は元禄五年の春に宝陀峰すなわち山城（京都府）洛北の鷹峰山源光庵において跋文を撰している。道白が在世していた当時、すでに『無門関』は広く刊本として流布していたが、一方の『無門開和尚語録』の方は世にほとんど知られていなかったものであり、そのため道白としては『無門開和尚語録』を再版する意義を強調している。

このほか駒澤大学図書館に『無門開和尚語録事畧』（外題は『無門開禪師語録事畧』とする）と題する四冊本の写本（駒一二四―九七）も伝えられている。これは『無門開和尚語録』に載る語句について一々に語釈したものであるが、如何なる禪者が註を施したものなのかは定かでない。ただし、この『無門開和尚語録事畧』は残念ながら四冊の内で三冊目が欠損となっており、一冊目・二冊目・四冊目の三冊のみが残されている。幸いに二冊目の裏表紙の内側に「西笑院」の書込みが存することから、もともと東京都八王子市山田町にある臨済宗南禅寺派の兜率山廣園寺の塔頭西笑院に所蔵されていたものらしく、それが後に何らかの事情で駒澤大学図書館に納められたと見られる。廣園寺は無門慧開―無本覺心―孤峰覺明―拔隊得勝―峻翁令山と次第相承する法燈派の峻翁令山（法光円融禪師、一三四四―一四〇八）によって創建された寺院であり、西笑院も令山の法を嗣いで廣園寺第四世となった道運□慶（?―一四二八）によって開かれ、廣園寺の末院（塔頭）として位置づけられている。⁽⁷⁾

後に触れるごとく慧開の本師である月林師観にも『月林観和尚語録』一卷が残されているが、これら『月林観和尚語録』『無門開和尚語録』および法統の祖に当たる開福道寧の『潭州開福禪寺第十九代寧和尚語録』一卷などは、入宋して慧開の法を嗣いで帰国した無本覺心の存在を縁として日本禅林に請来されたものであり、覚心がその系統を嗣承しなかったならば日本に請来されずに終わったはずの語録である。その面でも『潭州開福禪寺第十九代寧和尚語録』『月林観和尚語録』『無門開和尚

語録』の三語録は、稀有にして現今まで残された貴重な禪籍といつてよい。

無門慧開の法諱と道号

無門慧開という禪者について最初に問題とすべきは法諱と道号のことであり、さらに出身地と俗姓に関して触れなければならない。『統伝燈録』の「黃龍慧開禪師」の章では、この点に関して僅かに「黃龍慧開禪師、字無門。杭州人」と記すのみであるが、これにつづく『増集統伝燈録』に至ると「隆興黃龍無門慧開禪師、杭州良渚人、俗姓梁。母宋氏」といくぶん詳しく伝えられており、『補統高僧伝』でも「慧開、字無門。杭之良渚人、俗姓梁。母宋氏」と記されている。

この人は法諱を慧開または恵開といい、字または道号を無門と称している。法諱の慧開とは仏門に投じて出家得度した際に受業師から付与されたものであろうが、意のごとく仏智慧が開ける意として命名されたものであろう。また慧開を恵開と記す史料も存しているが、慧開と恵開は同義と見てよいであらう。一応、本稿においてはより一般的な慧開をもってこの人の法諱として統一しておくことにしたい。慧開が活動した南宋代に法諱の下字に「開」の字を用いた禪者としては、大慧派に亘庵道顔（萬庵、一〇九四—一二六四）の法を嗣いだ麟庵□開がおり、虎丘派に松源派祖の松源崇嶽の法を嗣いだ掩室善開の存在が知られる。さらに慧開より若干ながら後輩に当たると見られる嗣承未詳の禪者として石門□開が存しているが、石門□開の場合は慧開と同じく門と開の關係で名が付けられている。いずれにせよ、南宋禅林で法諱の下字に「開」を用いた禪者の用例は意外に少ないといえよう。

道号の無門については、いうまでもなく法諱の下字である「開」の語に因んで命名されたものであって、道号と法諱の關係は「門など無く開かれています」といった意にほかならない。『宗門聯燈会要』卷一〇「鄂州灌溪志閑禪師」の章には「示衆云、十方無_二壁落_一、四面亦無_二露保_一、赤洒洒、没可把。便下座」（_二正統藏一三六・三〇二b_一）とあり、臨濟下の灌溪志閑（？—八九五）が「十方に壁落無く、四面に亦た門無し」の語句を用いているから、無門とは四面十方に何ら自己を隔てる窓（壁落）や門などない融通無礙なさまを意味しよう。この点は慧開の本師となった月林師観も『月林観和尚語録』『月林和尚住平江府蠡口聖因禅院語録』の入院法語において、

師於_二嘉泰元年七月十四日_一入院。指_二三門_一云、仏語心為_レ宗、無門為_レ法門。箇裡全身入、別是一乾坤。（_二正統藏一二〇・二四二b_一）

とあり、やはり「無門を法門と為す」と語っている。ただし、慧開の場合はさらに「無字の関門が開かれた」という意味に転じて用いられており、後に慧開が本師の師観のもとで参究した「趙州無字」の古則すなわち無字の公案に基づいていると見てよく、無字に因む彼自身の拈提である『無門関』とも密接に関わっていることは疑いない。この無門の道号が慧開自身で称した自号であつたのか、本師師観から付与された道号頌の類であつたのかは定かでないが、師観との関わりから無門の道号を使用していることは疑いない。そんな慧開と無字の公案との関わりについては、後段で詳しく触れることにしたい。

実のところ、慧開が活動した南宋代には道号の上字に「無」の字を用いた臨済禪者が数多く存しており、枚挙に暇がないほどである。すでに早く黄龍派には無示介諶（分諶とも、一〇八〇—一一四八）・無竭浄曇（一〇九一—一一四六）・無伝居慧（二〇七七—一一五一）・無諍慧初・無住□本などが存しているから、十二世紀前半から「無」の文字が道号に用いられるようになったことが知られる。これが十二世紀の後半以降になるとさらに傾向が加速しており、楊岐派には無著道閑（？—一一四七）・無庵法全（一一一四—一二六九）・無証了修・無芳□覺・無号□燾・無行達真（？—一二六三）などが存しており、大慧派には無著妙総尼（一一〇九五—一二七〇）・無等有才（一一一六—一一六九）・無用浄全（越州翁大木、一一三七—一二〇九）・無住紹淵・無禪立才・無際了派（一一四九—一二三四）・無二□月・無念慧真尼（一一四一—一二三八）・無字宗印・無象宗覺・無量宗寿（崇寿とも）・無極浄観・無境印徹・無文道璨（柳塘、一二一一—一二七二）・無塵□浄・無聞□知・無等惠融（慧融・無得了慈・無方□安などが存している。虎丘派下でも松源派に無明慧性（惠性とも、一一六〇—一二三七）・無相□範・無得覺通・無禪慧信・無禪信心・無尔可宣（無爾とも）・無機普慧および日本の無象静照（法海禪師、一二三四—一三〇六）などがあり、曹源派に無文正伝があり、破庵派には無準師範（仏鑑禪師、一一七七—一二四九）・無関普門（字は円証、？—一二六二）・無学祖元（子元、仏光国師、一二六一—一二八六）・無疑道信・無則□儀らが存しており、とくに無準下の雪巖祖欽（慧朗禪師、？—一二八七）のもとには無一□全・無涯□浩・無極□源といった法嗣の名が知られる。慧開自身の法を嗣いだ門人にも日本の無本覺心のほかに無伝□祖・無聞□聰・無疑□定・無地□基など、道号の上字に「無」を用いた禪者が数名ほど見られるのは特徴的であろう。一方、曹洞宗でも長翁如浄（浄長、一一六二—一二二七）の法を嗣いだ高弟に日本の永平道元と同門に当たる無外義遠（？—一二六六）や無执徳霑の存在が知られる。これらの中でとくに破庵派の無準師範の法を嗣いで福州（福建省）閩県の鼓山湧泉禪寺に住持した無関普門の場合、明らかに慧開と同じく「無字関門」に因んで名が付けられている。日本禅林でも京都の瑞龍山南禅禪寺の開山となつた

聖一派の無関玄悟（普門房、仏心禪師、大明国師、一二二一—一二九一）も同様の発想で一に無関普門と通称されている。⁽¹⁰⁾

出身地・俗姓と出生年時

つぎに慧開の出身地と俗姓および出生年時などに関して、一通り考察をなしておきたい。慧開は南宋の国都（行在所）に当たる杭州（浙江省）臨安府の出身であり、すでに『統伝燈録』でも「杭州の人」と記されている。『増集統伝燈録』ではさらに詳しく「杭州良渚の人」とあり、『補統高僧伝』でも「杭の良渚の人」と伝えていることから、慧開が杭州地内でも具体的に餘杭県良渚（一に梁渚とも）の出身であったことが知られ、現今の浙江省杭州市西地区の餘杭区良渚鎮に当たっている。また慧開の俗姓については『増集統伝燈録』『補統高僧伝』ともに父方の俗姓を梁氏と記し、母親の俗姓が宋氏であったことを伝えてゐる。ただし、父親ないし父方の梁氏一族のこと、母方の宋氏一族の詳細については何も記されていない。良渚の地は一に梁渚と記されることもあり、父方の梁氏という俗姓と地名の梁渚が何らかの関わりを持つてゐるのかも知れない。

松源派の滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一二五〇）は杭州臨安県の阮氏の出身で松源崇嶽の法を嗣いだ高弟として名高いが、この人も晩年に明州（浙江省）鄞県の天童山景德禪寺の住持職を退いた後、郷里に近い良渚（梁渚）の地に居して世を終えてゐる。『天童寺志』巻七「塔像攷」の「天目礼禪師舍利塔」の箇所以德雲状「天目禪師行状」が伝えられており、

師諱文礼。号滅翁。杭之臨安人。姓阮氏。家在「天目山之麓」。因号云。主「京城之広寿、永嘉之能仁、安吉之福泉、行都之浄慈、四明之天童」。帰終「于梁渚西丘」焉。嬰「微恙」、説「偈脱去」。荼毘不「壊者」二、頂骨齒舍利如「燦珠」、附「天童応菴塔之東」。寿八十四、臘六十八。

淳祐十年十月十日卒也。

と記されている。文礼は諸刹を歴住して杭州錢塘県の南屏山浄慈報恩光孝禪寺を経て明州の天童山に住持しているが、晩年に良渚（梁渚）の西丘に帰隠してその最期を迎えている。南宋末期の潜山文珣（一二二〇—？）の『潜山集』巻八「五言律」には「天目禪師帰「梁渚旧隠」」と題した詩偈が残されている。

また南宋中期に『釈門正統』八巻を編集した宗鑑も慧開と同じく杭州良渚の出身であり、『釈門正統』巻一には「良渚沙門宗鑑集」（已統歲一五〇・三五七b）とあり、宗鑑は嘉熙元年（一二三七）三月一〇日に「釈門正統序」を撰している。慧開の法統の祖である楊岐派の月庵善果（二〇七九—一一五二）の法を嗣いで潭州（湖南省）瀏陽県の石霜山崇勝禪寺に住持した同名の

宗鑑という禅者がいるが、この宗鑑は慧開の法統の師翁である老衲祖証と同門で、慧開にとって法叔祖に当たっている。『釈門正統』八巻を著した良渚出身の宗鑑は慧開と同世代に生存した教僧と見られることから、楊岐派の石霜宗鑑とは宗派や年代はもろろん活動した地域も相違していて全くの別人ということになる。

さらに『慧文正辯仏日普照元叟端禅师語録』巻八末の黄潛撰「塔銘」によれば、

皇慶壬子、遷_二靈隱_一。（中略）陛辞南帰、即_レ弘_レ衣去、養_二高_二于良渚之西庵_一。至治壬戌、径山虚_レ席。三宗四衆咸謂、非_レ師莫_二能荷_二負_二其任_一。相率白_二于宣政行院_一、請_レ師補_二其処_一。（正統蔵一二四・三四d）

という記載が存しているから、元代に活躍した大慧派の元叟行端（慧文正辯仏日普照禅师、一二五五—一三三二）が杭州钱塘県の北山景德靈隠禅寺の住持を退いて後、やはり良渚の西庵に草庵を結んでおり、暫しの閑居を経て至治二年（一三三二）に至って杭州餘杭県の径山興聖万寿禅寺に勅住している事実が知られる。文礼や行端らの事跡からすると、当時、良渚ないし梁渚の地は住持職を退いた禅者にとって暫し隠棲閑居するのに適した景勝の地であったことになろう。

つぎに慧開の出生した年時が何時であったのか、この点について具体的に触れておきたい。『増集統伝燈録』と『補統高僧伝』ではいずれも慧開の示寂年時や世寿について何ら記載が存しないため、この両史料を通しては出生年時を知ることができない。ただし、幸いなことに後に詳しく触れるごとく覆元五山版『無門開和尚語録』の末尾に慧開が示寂する前後の動向が付記されていることから、慧開が庚申の歳すなわち南宋後期の景定元年（一二六〇）四月七日に世寿七八歳で示寂したことが窺われる。これを逆算すると、慧開は南宋中期の淳熙一〇年（一一八三）に杭州餘杭県良渚の地に梁氏の子として出生していることになろう。したがって慧開は破庵派の無準師範（仏鑑禅师、一一七七一—一二四九）より六歳の年少であり、松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）よりは二歳の年長に当たっている。以下、この淳熙一〇年の出生説に基づいて慧開の事跡を逐次追っていくことにしたい。

杭州天龍寺で出家得度する

慧開が出生したときの出生譚の類いや幼児期になした逸話などについては、残念ながら何も伝えられていない。また慧開が如何なる因縁で仏門を志し、出家学道することになったのか、その間の事情についても定かでない。わずかに『補統高僧伝』

に「師形体姪小」とあり、後代の記載ながら『康熙錢塘県志』にも「慧開生而貌小」という記載が見られる。姪小あるいは貌小とは姿の小さいさまであり、これが史実であるならば、慧開はかなり小柄で貧相な体格であったものらしい。禪僧で小柄な人といえは唐末五代に活躍した洞山下の疎山匡仁（矮師叔）がすぐに想起されるが、慧開にもまた小柄ゆえの劣等感に近いような想いが存し、あるいはそれが逆にこの人をして出家求道を志す上で一つのすぐれた因縁となったのかも知れない。

『増集続伝燈録』と『補統高僧伝』によれば、いずれも慧開の出家得度について「礼三_三天龍_三肱和尚、為受業師」と記されており、慧開が天龍の肱和尚を礼して受業師としたことを伝えている。ただし、慧開が如何なる因縁で出家を志すに至ったのか、実際に何歳のとき仏門に投じて剃髪したのか、その詳細は何ら記されていない。受業師とは仏門に投じて剃髪得度した際の師匠のことであり、天龍とは肱和尚の道号ではなく、この人が住持した禪寺の山号か寺号を指しているよう。肱和尚とは天龍という禪寺に住持していた□_三肱_三という禪者のことであるが、この人については事跡が何ら判明しない。しかしながら、慧開が杭州良渚の出身であることから、天龍というのも杭州地内か近隣の州府に存した寺院であったと解するのが自然であろう。この点で注目されるのが『景德伝燈録』巻一〇に「明州大梅山法常禪師法嗣」として「杭州天龍和尚」の章が存している事実であろう。杭州天龍和尚とこれに関わる系譜を示すならば、およそつぎのごとくになるう。



杭州天龍は南嶽下の馬祖道一（馬大師、大寂禪師、七〇九—七八八）の高弟である大梅法常（七五一—八三四）の法を嗣いだ唐代禪者であり、法嗣には金華俱胝と新羅国彦忠が存している。『無門関』第三則「俱胝豎指」の古則には、金華俱胝のことばとして「吾得三_三天龍一指頭禪、一生受用不_レ尽」とあり、杭州天龍の「一指頭禪」のことが触れられている。この場合の天龍とは法諱ではなく住持した寺院名であって、杭州天龍和尚はまさに杭州地内の天龍寺に住持していたわけである。『景德伝燈録』巻一〇には「明州大梅山法常禪師法嗣」として「杭州天龍和尚」の章が存しており、

杭州天龍和尚、上堂云、大衆、莫待「老僧」、上來便上來、下去便下去。各有「華藏性海」具「足功德無礙光明」、各各參取、珍重。僧問、如何是祖師意。師豎「起扚子」。僧問、如何得「出三界」去。師云、汝即今在「什麼處」。（大正藏五一・二八〇a）

としてわずかに大衆（修行僧たち）に説示した一つの上堂を収め、また修行僧と交わした二つの問答を載せるにすぎない。しかしながら、同じく『景德伝燈録』巻一一に「天龍和尚法嗣」として「婺州金華山俱胝和尚」の章に、

婺州金華山俱胝和尚、初住庵。有「尼名」実際、到庵戴「笠子」執「錫繞」。師三匝云、道得即拈「下笠子」。三問師皆無「对」。尼便去。師曰、日勢稍晚、且留一宿。尼曰、道得即宿。師又無「对」。尼去後歎曰、我雖「处」丈夫之形、而無「丈夫」之氣。擬「棄」庵往「諸方」參尋。其夜山神告曰、不須「離」此山、将有「大菩薩」來、為「和尚」説法也。果旬日、天龍和尚到庵。師乃迎礼、具陳「前事」。天龍豎「一指」而示之。師当下大悟。自「此」凡有「參学僧」到、師唯豎「一指」、無「別提唱」。有「一童子」、於「外」被「人」詰曰、和尚説「何法要」。童子豎「起指頭」。帰而拳「似師」。師以「刀断」其指頭。童子叫喚走出。師召一声。童子回首。師却豎「起指頭」。童子豁然領解。師將「順世」、謂「衆」曰、吾得「天龍一指頭禅」、一生用不「尽」。言訖示「滅」。（大正藏五一・二八八a~b）

という記事が載せられている。婺州（浙江省）金華県の金華山で俱胝が實際尼となした因縁譚を介して、天龍が金華山の草庵（後の俱胝禅院か）に到って俱胝に対して「指頭を竖起して接得した、いわゆる「天龍一指頭禅」の機縁が詳しく伝えられている。また俱胝はその後も「天龍一指頭禅」を挙揚しつづけており、門下の一童子との間で交わされた商量が劇的な接化手段として示されている。¹³⁾

杭州天龍寺の変遷

そこでつぎに杭州地内に存したとされる天龍寺について調べてみると、この寺は現在も杭州市钱塘県の玉皇山の南麓に残っており、寺内の造像が五代呉越国の仏教造像として傑出していることから、中国の全国重点文物保护单位に指定されている。南宋後期に編纂された『咸淳臨安志』巻七七「寺觀三（寺院）」の「城外自「慈雲嶺郊臺」至「嘉会門泥路龍山」の箇所に、

感業寺。乾徳三年、呉越王建。旧名「天龍」。大中祥符元年、改「今額」。建炎三年兵燹、惟木觀音存。

とあり、かつて天龍寺と称されて杭州钱塘県城南に存した感業寺という寺院の大まかな変遷が知られる。後世この寺は再び天龍寺と称せられており、『武林梵志』巻二「城外南山分脈」に、

天龍禪寺、在「慈雲嶺之陽」。唐真覺禪師建。宋乾德三年、吳越王建、以居「鏡清禪師」。大中祥符元年、改「名感業」。建炎三年大火、唯木觀音像独存。紹興十三年建、園丘以「淨明院」為「齋宮」、以「感業」居「從官」。從之僧徒漸散、而寺亦圯。元延祐間、僧道平重建。至正間、南北兩山諸刹、或毀或頽、惟天龍僅存。寺有「堂」扁曰「天龍」、趙子昂書。曰「天龍深処」、兪本書。曰「山舟」、貫雲石書。寺中有「凝翠井」、寺外夾「道植」松。王鼎書「松閣」扁於谷口。元泰定、平大道・貴無用兩禪師重建。嘉清間燬、明迪・明寿重建。萬歷二十三年、寂時普鉅鼎新之。有「大雄・天王・觀音」三殿、東西隱。

とあり、その後の変遷も含めて天龍寺の状況がいくぶん詳しく伝えられる。『西湖遊覽志』卷六「南山勝蹟」には、

天龍寺、宋乾德三年、吳越王建、以居「鏡清禪師」。大中祥符元年、改「名感業」。建炎三年大火、惟木觀音像独存。紹興十三年建、園丘以「淨明院」為「齋宮」、以「感業」居「從官」。從此僧徒漸散、而寺亦圯。元延祐間、僧道平重建。至正間、南北兩山諸刹、或燬或頽、惟天龍僅存。寺有「堂」扁曰「山舟」、貫雲石所書。寺中有「凝翠井」。

とあり、『武林梵志』より若干ながら簡略に伝えている。これらの記事を総合すると、この寺は杭州府城外の南山分脈の龍山慈雲嶺の陽に存しており、これが現在の玉皇山の南麓というのに相応しよう。また『武林梵志』によれば「唐の真覺禪師建つ」とあるから、唐代に真覺禪師という人によつて何らかの堂宇が建立されていた事実を伝えている。真覺禪師というと青原下の雪峰義存（真覺大師、八二―九〇八）の名がすぐに想起されるが、状況的にここにいう真覺禪師は義存とは全くの別人であろう。しかも真覺禪師が天龍寺の開創者であるならば、杭州天龍和尚その人のことを指していると見られるが、真覺が法諱であったのか、それとも禪師号の類であったのかについても判然としない。もともと天龍真覺が在世していた頃にはいまだ正式な堂塔伽藍などは存していなかったと見られ、おそらく質素な草庵の類が建てられていた程度であろう。

諸史料によれば、正式に天龍寺の伽藍が創建された時期を北宋初期の乾德三年（九六五）と伝えているが、これも状況的に五代の乾德三年（九二二）の誤りであろうと見られる。吳越王錢氏すなわち錢鏐（字は具美、武肅王、八五二―九三二、在位は九〇七―九三二）が伽藍を建てて「天龍禪寺」と称し、「鏡清雨滴声」の古則公案で名高い雪峰下の鏡清道愆（順德大師、八六八―九三七）を住持に迎えたことが特筆されている。この点は『景德伝燈録』卷一八「杭州龍冊寺順德大師道愆」の章においても、師罷参、受請止「越州鏡清禪苑」、唱「雪峯之旨」、学者奔湊。（中略）錢王欲「广」府中禅会、命居「天龍寺」。始見師乃曰、真道人也。致礼勤厚、由是吳越盛「於玄学」。其後又創「龍冊寺」、延請居焉。（大正蔵五一・三四九a・b）

と記されており、呉越王錢鏐が天龍寺を創建して道愆を開山に迎えた経緯が伝えられている。⁽¹⁵⁾これによれば、温州（浙江省）永嘉県の陳氏の出身であった道愆は、雪峰義存の法を得て後、最初に越州（浙江省）会稽県の鏡清禪院に化導を敷いていたが、その名声を知った錢鏐が杭州地内の禪林をより充実させるために道愆を拝請して天龍寺に住持せしめ、初めて相見した際に錢鏐は道愆を「真の道人なり」と称えて厚く礼遇したと伝えられる。錢鏐と道愆との関わりからすれば、天龍寺伽藍の創建は五代の乾徳三年でなければならぬ。

また『景德伝燈録』卷二一に「福州玄沙師備禪師法嗣」として「杭州天龍寺重機明真大師」の章（大正蔵五一・三七二c）が存し、『景德伝燈録』卷二四に「漳州羅漢院桂琛禪師法嗣」として「杭州天龍寺秀禪師」の章（大正蔵五一・四〇一a-b）が存しているから、一指頭禪で有名な杭州天龍和尚ゆかりの天龍寺には唐末五代から北宋初期にかけて、鏡清道愆につづいて同じ雪峰下の玄沙師備（謝三郎、宗一大師、八三五-九〇八）の法を嗣いだ天龍重機（明真大師）や法孫に当たる天龍□秀（清慧大師）らが相繼いで住持として活躍した状況が窺われる。⁽¹⁶⁾上記の禪者たちを六祖下の系譜で示すならば、

六祖慧能 — 青原行思 — 石頭希遷 — 天皇道悟 — 龍潭崇信 — 徳山宣鑑 — 雪峰義存 — 玄沙師備 — 羅漢桂琛 — 天龍□秀
 — 南嶽懷讓 — 馬祖道一 — 大梅法常 — 杭州天龍（真覺） — 鏡清道愆 — 天龍重機

ということになり、五代から北宋初期にかけて天龍寺は雪峰義存の門流の禪者らによって維持されていた状況が知られる。北宋の大中祥符元年（一〇〇八）に至って天龍寺は感業禪寺と名を改めているが、そのときの住持が誰であったのかは定かでない。その後もこの寺の通称として天龍寺という寺名が併用されていたと見てよく、天龍感業禪寺という呼称で知られていたものであろう。南宋初期の建炎三年（一一二九）に天龍寺は大火に遭って伽藍が焼失し、僅かに木造観世音菩薩像のみが焼け残ったと伝えられる。紹興一三年（一一四三）に伽藍が修復されたが、圜丘という人が寺内の浄明院を齋宮となし、一時期、天龍寺は従官すなわち皇帝直属の役人の宿舎に改装されていたものらしい。このため伽藍は衰退したとされるが、少なくとも慧開が到った十二世紀末頃には天龍□脰が住持していたわけであるから、その頃には天龍寺は禪寺に復帰して伽藍もそれなりに機能していたはずであらう。

慧開は杭州天龍寺の天龍□肱のもとで幼くして童子行者（童行）として仏門への第一歩を記し、やがて得度剃髪して沙弥となり、仏教学の基本を修学するとともに參禪學道のあり方などについて一通り修得したことであろう。当然ながら慧開という法諱も剃髪得度した際に天龍□肱より直に付与されたものと見られ、慧開がこの人から受けた法恩はきわめて大きかったと推測される。この点、時代は若干ながら下って元代後期ではあるものの、『補統高僧伝』卷二五「德然伝」に、

德然、号唯菴、華亭張氏子。（中略）七歲、誦法華經於杭之天龍寺。慨然有游方之志、初見石屋珙公、後參千巖長禪師、大有契証。（已統藏一三四・一八六 a）

という記事が存している。破庵派（幻住派）の唯庵德然（松隱、？—一三八八）は嘉興路（浙江省 華亭県の張氏の出身であり、七歳のときに杭州天龍寺に上つて幻住派の無用守貴（水庵、一二九〇—一三六二）のもとに投じて『法華經』を誦誦したとされる。その後、慨然として諸山歴遊を志し、破庵派の石屋清珙（仏慈慧照禪師、一二七二—一三五二）に相見し、さらに幻住派の千巖元長（無明、仏慧円明広照無辺普利大禪師、一二八四—一三五七）に参じて機縁が契っている。南宋代の慧開の場合も、おそらく元代の德然と同じように幼くして郷里の天龍寺に投じて天龍□肱のもとで坐禪の実践や經典の誦誦など日々の行持を熟し、仏教教理の基礎知識を修得する勉学の日々がつづいたはずであらう。その一方で天龍寺が「天龍一指頭禪」ゆかりの故地であつたことを踏まえるならば、慧開は単に仏教学の素養を身に付けるのみでなく、禪者としての威儀作法や所作進退も修めていたことであらうし、古則公案を参究する看話禪の方向性などについても造詣を深めていったものと推測される。

『無門開和尚語録』卷下「真贊」には「法孫天龍長老思賢請」（已統藏二二〇・二六三 d）という真贊（自贊）が存しており、慧開の生前に初期の高弟の法を嗣いで法孫となつた思賢という禪者が天龍寺に住持している事実が知られる。天龍寺に住持していた思賢が法祖慧開の頂相を持参して慧開に贊を請うたのは、当然のことながら慧開が示寂する以前のことである。また元代中期の延祐年間（一二三〇—一二三二）に破庵派（幻住派祖）の中峰明本（幻住老人、一二六三—一三三三）の高弟と見られる大道善平によつて天龍寺の伽藍が重建されており、元代の文人として名高い趙孟頫（字は子昂、松雪道人、一二五四—一三二三）が揮毫した「天龍深处」の額などが寺内に掲げられていたとされる。さらに元代末期には幻住派の千巖元長が天龍寺の東庵に隠閑しており、『千巖和尚語録』「上堂」には「杭州天龍禪寺新建僧堂請上堂」（嘉興藏三二・二〇七 a）が収められているが、これは天龍寺に新たに僧堂が建てられた際になされた上堂である。また元長の法を嗣いだ無用守貴も天龍寺に住持しており、

守貴には伝記史料として『宋学士文集』巻六一「芝園統集巻一」や『宋文憲公護法録』巻三「元末大浮屠塔銘」に「天龍禪師無用貴公塔銘有序」が残されている。¹⁹元末明初の文豪として名高い宋濂（字は景濂、号は潜溪、諡は文憲、一三一〇—一三八二）にはこのほかにも『宋学士文集』巻六九「芝園統集巻九」や『宋文憲公護法録』巻五「記」に「杭州天龍寺石仏記」が収められている。

本師月林師観の事跡

その後、慧開は参師問法の行脚に赴いており、参禅学道の過程で本師と仰ぐことになるのは、楊岐派の月林師観（崇観とも、一一四三—一二二七）という禅者である。師観には『月林観和尚語録』一卷が伝えられており、²⁰しかも巻末には幸いにも朝散大夫の陳貴謙（字は益父）が撰した「月林観禪師塔銘」が載せられていることから、詳しい事跡を窺い込めることができる。陳貴謙は嘉定一年（一二一八）上元日に『月林観和尚語録』に序文（正統蔵一二〇・二四二a）も寄せており、その年五月に慧開は師観が開山となった湖州（浙江省）武康県の報因佑慈禪寺に第二代として開堂出世しているから、陳貴謙とは旧知の仲であったと見てよい。『枯崖和尚漫録』巻上にも「安吉州烏回月林観禪師」（正統蔵一四八・七四c・d）の項と「月林観禪師会中」の項（正統蔵一四八・七五a）があり、同巻中「国史陳公貴謙」の項（正統蔵一四八・八六a）には陳貴謙が師観と交流した様子も伝えられている。²¹

つぎに『月林観和尚語録』に付される陳貴謙が撰した「月林観禪師塔銘」の全文を示すならば、以下のような内容である。

月林観禪師塔銘。

朝散大夫知太平州軍州兼管内観農營田事、陳貴謙撰。

朝奉郎尚書礼部員外郎、陳誼書。

朝請大夫真宝文閣同浙路計度転運副使、趙伸夫篆。

師名師観、道号月林。福州候官黄氏子。八歳、牧牛鞭叱間、忽若有省、遂屏羣血不茹。十四歳、入雪峯山、投忠道者出家。尋至荆南二聖寺、朝夕研究趙州狗子話。因洗盞次、口自成頌、從此慧解横發。師心知其非、不作聖証、閉門苦參。二十四、祝髮受戒、具礼住山戒準為師。時証老衲住澧州光孝、道法盛行。師径造其室。衲云、若能転物、即同如来。面前香臺、作廢生

転。師云、築著碁著。衲叱云、去。会衲退_レ席、師往_レ来雲蓋・瀉仰者四季、復帰_二雪峯・鼓山_一。時可菴然・尤溪印、俱在_二閩中_一。師歴扣与_レ之爭_レ鋒。然自以為_レ未_レ足。聞_二老衲移住_二饒之薦福_一、即徒步從_レ之。看_二雲門話墮話_一者又十年。一日遶_二蓮池_一而行、自拳云、那裏是有_二僧話墮處_一。豁然大悟。遂造_二方丈_一自通。衲問、諺訛在_二什麼處_一。師云、豈不_二是張拙秀才語_一。衲云、礼拝。即以_二法衣_一付_レ之。自_レ此尽得_二向上機用_一、前無_二堅壘_一矣。衲遷_二四祖_一、移_二大洪_一、師皆与_レ俱。又嘗至_二廬陵_一、見_二常不輕_一、拳_二不是心不是仏話_一。師又手_レ常率_二衆留_レ師、居_二第一座_一。久之東遊_二雪竇山_一、足菴鑑拳以_二立僧_一。遊_二育王山_一、仏光照_レ問師、悟底人還有_二自己_一也無。師云、適来拳_二似禪師_一了。照云、漆桶。師即喝。照知_二師為_二老衲法子_一問、那裏是者僧話墮處。師云、文不_レ加_レ点。照益奇_レ之。一時禪林法窟、爭欲_二得_レ師為_二上首_一。常不輕住_二瑞巖_一、塗毒策住_二双徑_一、皆以_レ偈延_二師分座_一。師皆諾_レ之。塗毒又贈_二偈云_一、喪_二尽平生家珍_一、偶到_二徑山峯頂_一、塗毒微笑_一、唯渠点頭自領。繼又為_二迦庵演_一、無証修、分座說法。於_二蘇常間_一、緇素帰重、不_レ容_二晦藏_一。嘉泰初、年踰_二五十_一矣。呉門聖因寺虚_レ席、諸山合_レ辭請_二師出世_一。宴坐凡四年、遷_二住承天_一、再遷_二万寿_一。呉人久服_二師道行_一、施者傾_レ困、学者問_レ法、戸外之屨常滿。如是者又幾十年、老勸_二応酬_一、退_二處西湖_一、為_二終焉計_一。李開府姜、勸_二寺於上柏_一曰_二報因_一、具_二衣冠_一造_レ師、固請為_レ之開山。其後復住_二平江靈巖_一。又其後也武康烏回寺僧、偕_二鄉人數百_一環拝而請_二師_一。復勉從_レ之。所_レ住即為_二大叢林_一。垂慈接物、隨_二其根器_一、示以_二方便_一。至_二室中_一則機鋒峻峭、不_レ可_二湊泊_一、昼夜危坐、念慮_二□微_一。六坐_二道場_一、僅以_二巾鉢_一自隨、微有_レ不_レ合、倏然去_レ之、未_レ嘗回顧。人多不_レ知_二其所_レ往_一、芒鞋徒步。至_レ老不_レ變。始或疑_二其出_二於矯弘_一、隨起_二深信_一、因自調伏者、良不_レ少也。後住_二烏回_一時、已示_レ疾日、猶再鼓入室、且曰、桂花開時吾行矣。俾_二其徒預結_二夏制_一、已而桂果盛開。晨興集_二衆普説_一、趺坐深定。至_二夜一鼓_一、顧_二左右_一曰、釈迦老子如是、吾亦如是。侍僧請留_レ偈、書已擲_二筆而行_一。嘉定丁丑四月十有三日也。閏_二世七十五_一。坐五十一夏。閨維煙霧結如_二臺蓋_一、舍利無數、皆成_二五色_一。其徒即_二寺之西壘_一、塔以藏_二其骨_一。弟子妙湛、繼_二踵住山_一、実崇奉_レ之、造_二余門_一而請曰、先師託交遊甚久、且嘗遺_レ之以_レ詩、又題_二其語録_一矣。今願得_レ銘。銘曰、

楊岐七世、冷然家風、現_二水中月_一、似_二空非_レ空_一。六坐_二道場_一、单_二提祖令_一、如_二大火聚_一、鎔_二凡煨_一聖。惟烏回山、是為_二師塔_一、青山流泉、常説_二妙法_一。母_レ曰_二是塔_一、足以見_二師_一、夜半有_レ衣、尚克嗣_レ之。(正統藏二二〇・二四九b・d)

以上が陳貴謙撰「月林観禪師塔銘」の全文であるが、残念ながら慧開の名は載せられていない。撰者の陳貴謙は朝散大夫知太平州軍州兼管内観農營田事の肩書きで塔銘を撰している。文面を筆写した陳誼は朝奉郎尚書礼部員外郎の肩書きを用いている。塔銘を篆刻した趙仲夫(字は信道、一一六二—一二三二)は朝請大夫真宝文閣兩浙路計度転運副使の肩書きを用いている。

一方、『枯崖和尚漫録』卷上「安吉州烏回月林觀禪師」の項にも、つぎのような比較的に詳しい師觀の事跡を伝えている。

安吉州烏回月林觀禪師、性純誠無矯飾。福之候官黃氏子。初為牧童、鞭叱牛有省。屏草血、投雪峰忠道者出家。謁荊南二聖戒準得度。見澧州証老衲獲其法。初造室、聞拳話云、若能軋物即是如来、面前香臺作麼生軋。曰、築著磕著。被叱去。復隨侍過饒之薦福、看雲門話墮又十年。一日繞蓮池行、自誦云、那裏是這僧話墮處。忽大徹。塗毒在徑山、懸庵在華藏、皆有書致之分座。頌洞山麻三斤云、臂上碧斑賓豹博、舌頭當的帝都丁、頻呼小玉一元無事、只要檀郎認得声。嘉泰間、瑞世吳門聖因、遷承天・万寿、學者輻湊。住烏回示疾日、猶再鼓入室。且曰、桂花開時吾將行。俾其徒預結夏制、已而桂花盛開。嘉定丁丑四月十三日也。參前入室、再鳴鼓普說。衆集定拈拄杖云、有拄杖与拄杖、無拄杖奪拄杖。衆中莫有会底、出来道看。衆無對。擲下拄杖。危坐書偈而寂。閱世七十五、坐夏五十一。閻維舍利不可計。烏摩、命世宗師處死生、如雲行鳥飛、初無留礙。烏回夏中入滅、桂盛開如其言。此尤見其超絕奇瑞明驗處、非荷負大法精一力乎。（記統藏一四八・七四c・d）

そこには「月林觀禪師塔銘」では窺えない逸話なども見られることから、「月林觀禪師塔銘」と『枯崖和尚漫録』の「安吉

州烏回月林觀禪師」の項を合わせることで師觀の事跡がより露わとなろう。

慧開の本師は法諱を師觀といい、道号が月林と称しており、『続伝燈録』が法諱を崇觀とするのは誤りであろう。師觀は福州（福建省）侯官県の出身であり、俗姓は黃氏と伝えられる。嘉定一〇年四月に七五歳で示寂しているから、示寂年時と世寿を逆算すると師觀が出生したのは紹興一三年（一一四三）であつたことになろう。紹興二六年（一一五六）に一四歳で郷里の名刹である福州侯官県の雪峰山崇聖禪寺で黃龍派の毬堂慧忠（忠道者）に就いて出家得度し、遠く荊南（湖北省）公安県の二聖禪寺（興化寺）に到つて戒準という禪者のもとで「趙州狗子」の話頭すなわち無字の公案を参究し、乾道二年（一一六六）に二四歳で受戒したことが知られる。その後、師觀は澧州（湖南省）の光孝禪寺で楊岐派の老衲祖証に相見するのであり、諸山歴遊して後、祖証が饒州（江西省）鄱陽県の東湖薦福禪寺に住持したのを聞いて再び門下に投じており、このとき「雲門話墮」の古則を参究すること実に一〇年を経て大悟したとされる。その後、祖証が蘄州（湖北省）黄梅県の四祖山正覺禪寺や随州（湖北省）随県の大洪山保寿禪院に遷住するのに師觀も随侍している。ついで廬陵（江西省）にて師觀は大慧派の荷屋蘊常（常不輕）に参じて「南泉不是心不是仏不是物」の古則を参究し、そのもとで第一座（首座）を勤めている。

さらに師觀は東に歴遊して明州奉化県の雪竇山資聖禪寺に到つて曹洞宗真歇派の足庵智鑑（鄞行山菩薩、一一〇五—一一九二）

のもとで立僧首座を勤めている。智鑑はいうまでもなく長翁如浄の本師であり、日本曹洞宗の永平道元にとって師翁に当たる禅者にほかならない。当時は如浄が雪竇山で智鑑に参学嗣法している時期に相当しており、師観は雪竇山の智鑑のもとでしばらくの間は如浄と同参であったと見てよく、両者の間に何らかの交流が存したとしても不思議ではなく、あるいは首座師観が若き如浄に何らかの化導をなしていた可能性すら存しよう。ついで師観は明州鄞県の阿育王山広利禅寺に赴いて大慧派の拙庵徳光（東庵、仏照禅師、一一二一—一二〇三）のもとに投じており、問答を交わしてやはり徳光より深く認められている。智鑑が雪竇山に住持していたのは淳熙十一年（一一八四）から紹熙二年（一一九一）までの間であり、徳光が阿育王山に住持していた期間は淳熙七年（一一八〇）から紹熙四年（一一九三）までであることから、師観が雪竇山の智鑑のもとで首座を勤め、阿育王山の徳光のもとに投じて問答したのは淳熙十一年から紹熙二年までの八年間に限られよう。

その後も師観は明州定海県の瑞巖開善禅寺で再び荷屋蘊常のもとに投じて首座として分座説法し、杭州餘杭県の径山興聖万寿禅寺では黄龍派の塗毒智策（涂毒、一一七一—一九二）のもとでも首座として分座している。さらに常州（江蘇省）無錫県の華藏褒忠顕親禅寺で大慧派の遯庵宗演のもとと、蘇州呉県の万寿報恩光孝禅寺で楊岐派の無証了修のもとでも分座しており、大利の要職を熟してしだいに頭角を現していったのである。

月林師観は五〇歳に達して嘉泰元年（一二〇二）七月一日に蘇州（平江府）呉門の蠡口聖因禅院に開堂出世しており、四年を経て同じ蘇州呉県の承天能仁禅寺に遷住し、また呉県の万寿報恩光孝禅寺にも遷住している。ついで杭州臨安府の崇孝顕親禅寺の住持を経て、一旦は老齢に至って杭州西湖の湖畔に澄翠庵を結んで閑居したが、開府の李妻の懇請によって湖州（浙江省）武康県上柏の報因佑慈禅寺の開山となっており、蘇州呉県の靈巖山崇報禅寺に住持している。晩年に湖州武康県の烏回山密巖禅寺に化導を敷いたが、嘉定一〇年（一二二七）四月一三日に世寿七五歳、法臘五一齡で示寂している。

蘇州万寿寺に投じて月林師観に参学する

では、師観のもとに投ずることになった慧開は、師観に就いて如何なる参学研鑽をなしていたのであろうか。受戒はおそらく杭州地内の戒壇のある律寺でなされたものと見られるが、示寂した時の法臘などが伝えられていないため、具体的な年月などは知られない。また如何なる因縁で師観に参学することになったのかは定かでないが、おそらく師観のもとに参学する以前

にも幾人かの禪者のもとを歴参していたものと推測される。あるいは受業師の天龍□肱と師観の間に何らかの道交が存したのかも知れない。

『増集続伝燈録』によれば、慧開が師観のもとに参学した経緯について「参_レ月林於蘇之万寿_一、林令_レ看_二無字話_一」と伝えており、『補続高僧伝』にも「聞_二月林観公開_一法於万寿_一、師同_二石霜印公_一往謁_レ之。林令_レ看_二無字話_一」と記されている。慧開が師観に参じたのは蘇州呉県の万寿報恩光孝禅寺であつたことが知られ、とくに『補続高僧伝』が「月林観公の万寿に開法するを聞き」と記している表現を信用するならば、慧開が師観に初めて相見したのは師観が万寿寺に入寺開法して間もない時期であつたことになろう。さらに『補続高僧伝』では「師、石霜の印公と同じく往きて之れに謁す」と記されており、慧開がこのときやがて同門となる竹巖妙印（竹崖とも、一一八七—一二五五）とともに師観に謁したことを特筆している。すでに触れたごとく師観は嘉泰元年（一二〇一）七月に蘇州呉門の蠡口聖因禅院に開堂出世し、四年を経て蘇州呉県の承天能仁禅寺に遷住し、さらに同じ呉県の万寿報恩光孝禅寺に赴いている。師観が万寿寺に住持した時期は明確ではないが、慧開は万寿寺の師観の道誉を聞いてその門に投じていることになろう。

ちなみに南宋の嘉定年間（一二〇八—一二二四）に制定されたと伝えられる五山十刹制度によれば、承天寺は蘇州の甲刹であるが、万寿寺は同じ呉県の虎丘山雲巖禅寺とともに禅宗十刹に列した蘇州地内の大利であつて、万寿寺が十刹第四位、虎丘山は同第九位であつたとされている。蘇州の万寿寺には南宋末期に曹洞宗宏智派の東谷妙光（？—一二五三）や大慧派の淮海元肇（一一八九—一二六五）さらに松源派の訥堂浄辯などが住持し、五山に陞住する上で前段階の住持地として重きをなしている。元代にも松源派の南洲永珍（季潜、一二二五—一三〇〇）やその法嗣の中峰宗海が住持し、元末明初には大慧派の行中至仁（熙怡叟、澹居子、一三〇九—一三八二）なども住持している。元末明初の文人として名高い宋濂（字は景濂、号は潜溪・玄真子、諡は文憲、一二一〇—一三八二）の『宋学士文集』巻五六「芝園後集卷六」に「蘇州万寿禅寺重構仏殿碑」が収められており、これは『宋文憲公護法録』巻四「碑」に「蘇州万寿禅寺重仏殿碑」としても収められている。

慧開と同門に当たる竹巖妙印に関しては、大慧派（二に破庵派）の無文道璨（道燦とも、柳塘、一二一四—一二七一）が『無文印』巻五「塔銘」に「石霜竹巖印禅師塔銘」を残しており、曹洞宗真歇派の雪屋正韶（一二〇二—一二六〇）に関する「天池雪屋韶禅師塔銘」とともに詳しい事跡が知られる。ただし、「石霜竹巖印禅師塔銘」には妙印と慧開との具体的な道交を伝える

記事などは何も載せられておらず、

乃見^二月林于平江靈巖^一。於^二入室次^一、月林問、如何是祖師西來意。師答曰、直^二甚破燈盞^一。月林可^二其言^一而奇^二其器^一。朝煬夕煉、異時所^レ得尺短寸長、悉亡去無^二影像^一、載^レ道而帰。

と記されているから、妙印が師観に参学したのは慧開より遅く、師観が同じ蘇州呉県の靈巖山崇報禪寺に住持していた時期であつたことが知られる。状況としては慧開の方が法兄として先に万寿寺の師観に参随し、その後妙印が靈巖寺で師観の会下に投じたものであろう。『補統高僧伝』の記事は、師観の席下で慧開が法弟の妙印と同参として互いに切磋琢磨し、親しい交友を結んでいたことを暗に伝えた内容と解してよい。わずかに『枯崖和尚漫録』巻中「潭州石霜竹崑印禪師」の項に、

潭州石霜竹崑印禪師、隆興府人。道味苦嚴、見者莫^レ不^二肅然心服^一。抑齋陳公韓師^レ潭日、以^二龍牙・福嚴^一招致、皆不^レ赴。後以^二石霜^一請、不^レ得^レ已而応^レ命。僧問、如何是和尚家風。崑曰、問^二家風^一作麼。問、如何是仏法大意。崑曰、湘潭雲尽暮山出、巴蜀雪消春水來。同門秀孤峰・開無門、皆推^二遜之^一。平生機鍵續密、語言粹夷、豈非^下親見^二月林^一之力^上歟。(正統藏一四八・八六b・c)

とあり、妙印が開堂出世して以降も慧開や孤峰徳秀ら同門の禪者と道交をなしていた記事が伝えている。したがって、慧開は師観の席下で徳秀や妙印らと知り合つて以来、彼らと久しく関わりを保っていたものらしい。『補統高僧伝』が伝える慧開と妙印が同じ頃に師観のもとで参禪學道に精進して「無字公案」などを参究していたという記事は信憑性を認めてよいであろう。会下に投じてきた慧開に対し、師観は唐末の趙州從諗(眞際大師、七七八―八九七)に因む「趙州無字」の公案すなわち「狗子無仏性」の話頭を参究せしめている。しかもこれがやがて慧開が無字を中核とした『無門関』を拈提する遠縁となつていく点で重要であらう。

『月林観和尚語録』の「住湖州烏回山密嚴禪寺語録」(正統藏一二〇・二四六b・c)には「侍者恵開編」とあり、侍者恵開とは慧開その人にほかならないであらうから、慧開は師観が湖州(浙江省)武康県の烏回山密嚴禪寺に遷住していたときにも侍者として随侍し、上堂語録を編集しているわけである。⁽²⁶⁾『月林観和尚語録』にはこのほかに慧開の動向を伝える記事が見られないことから、慧開の参学期の動向を知る上で蘇州万寿寺から湖州密嚴寺における動向が辿れるのは貴重なものがある。

また『枯崖和尚漫録』巻上「月林観禪師会中有一杜多行」の項には「俱胝一指話」に因んで、

月林観禪師会中有^二一杜多行^一、明^二得俱胝一指話^一、且曰、吾老矣、須^二再来^一。帰寂後三十餘年、月林在^二湖之報本^一。夜夢開^レ室、拳^二俱胝

話、見^三杜多行造^一室堅^二一指。明旦室内拳^三前話。孤峰秀公、時在^二旦過中^一、趨入亦堅^二一指。月林曰、杜多行再来矣。（正統蔵一四八・七五a）

という不思議な因縁が記されており、師観が湖州の報本寺（報因佑慈禪寺のことか）に在ったとき、会下で「俱胝一指話」の公案が参究されていたことが知られる。ここでは慧開と同門に当たる孤峰徳秀が登場しているが、慧開も師観のもとで杭州天龍に端を発する「俱胝一指話」の公案を実地に参究していることであろう。

月林師観の法を嗣いだ高弟たち

『増集続伝燈録』巻二「目錄」には「万寿月林観禪師法嗣」として「黄龍無門恵開禪師」「石霜竹巖妙印禪師」「囊山孤峰徳秀禪師」「鴻福嵩巖師洗禪師」という四人の名を載せている。とくに本文には「隆興黄龍無門慧開禪師」の章につづいて「潭州石霜竹巖妙印禪師」の章と「興化囊山孤峰徳秀禪師」の章が立伝見録されているから、この三人が師観の嗣法門人の中で重要な位置を占めていたことになろう。また『祖燈大統』巻七五の目錄にも「万寿観嗣」として「黄龍慧開」「石霜妙印」「囊山徳秀」「鴻福嵩岳師洗」として四人の名を挙げ、とくに「南昌府黄龍無門慧開禪師」「長沙府石霜竹巖妙印禪師」「興化府囊山孤峰徳秀禪師」の章を載せている。慧開は竹巖妙印と孤峰徳秀とともにすぐれた高弟として知られたものであり、しかも筆頭に名が挙げられていることから、最も重要な法嗣と目されていたわけである。

一方、日本で中世に著された禅宗の宗派図としては、南北朝期の『仏祖正伝宗派図』に「万寿月林師観」の法嗣として、左から「囊山孤峰□秀」「石霜竹岩□印」「幽岩元溪□珪」「黄龍無門慧開」として四禅者の名が載せられている。室町中期の『仏祖宗派図』では「万寿月林師観」の法嗣として左から「幽崑元溪□珪」「囊山孤峰□秀」「黄龍無門慧開」「石霜竹岩□印」としてやはり四人の名が載せられている。ただし、『増集続伝燈録』と相違して「鴻福嵩巖師洗」の代わりに「幽岩元溪□珪」の名が載せられている。また高麗国の無学自超（溪月軒、妙巖尊者、一三二七—一四〇五）が所伝した『仏祖宗派之図』や愛知県一宮市の長嶋山妙興禪寺に所蔵される『仏祖宗派之図』には「月林観禪師」の法嗣として右から「竹岩印禪師」「無門開禪師」「孤峰秀禪師」として三人の名が載せられている。

江戸期に著された宗派図としては、『正誤仏祖正伝宗派図』三に「万寿月林師観」の法嗣として右から「石霜竹巖妙印」「黄

龍無門慧開（仏眼）「鴻福嵩巖師洗」「幽岩元溪□珪」「興化孤峯德秀」という五人の名が載せられている。また『掌珠宗派図』には「万寿月林師観」の法嗣として左から「無竜無門恵開」「供養嵩岩師洗」「石霜竹岩妙印」「囊山孤峰德秀」という四人の名が載せられている。『仏祖正伝宗派図』『仏祖宗派図』『正誤仏祖正伝宗派図』などでは、いずれも慧開の住持した禅刹を「黄龍」と表記しているから、のちに詳しく触れるごとく『増集続伝燈録』を含めていずれも慧開が洪州黄龍山で活躍した事実が強調されていることになろう。

中国撰述の禅宗燈史や日本で編集された宗派図などを整理すると、月林師観には無門慧開のほかに元溪□珪・嵩巖師洗・竹巖妙印・孤峰德秀という四人の嗣法門人が存したことが知られる。もともと「月林観禪師塔銘」によれば、師観の後席を継いで湖州烏回寺に住持した高弟に妙湛があり、この人が陳賁謙に師観の塔銘を依頼しているわけであるが、妙湛についてはそれ以上の事跡は定かでない。そこで以下、慧開と同門に当たる四人の禅者について一通り事跡を整理しておくことにしたい。

元溪□珪については『月林観和尚語録』『住平江府靈巖山崇報禪寺語録』に「侍者惟珪編」として名が載る惟珪のことを指していると思われる、正式には元溪惟珪と記すべきであろう。惟珪については郷閥や俗姓など事跡が定かでないが、師観が蘇州（平江府）呉県の靈巖山崇報禪寺の住持を勤めていた時期に侍者として上堂語録の編集に当たっていたことから、慧開や妙印らとも深く関わっていたはずである。惟珪が住持した幽岩については、雲門宗の智海本逸（正覚禪師）の法を嗣いだ幽巖□覺や楊岐派の圓悟克勤の法を嗣いだ幽岩□珊、黄龍派の草堂善清の法を嗣いだ東山慧空（一〇九六一一五八）や楊岐派の大慧宗杲の法を嗣いだ普慈蘊聞（慧日禪師）などが住持した福州（福建省）古田県の幽岩禪寺（幽巖弥勒禪院）のことを指しているものであろうか。あるいは曹洞宗（真歇派祖）の真歇清了（寂庵、悟空禪師、一〇八八一五二）の法を嗣いだ幽岩了詠（了諒とも）が温州（浙江省）の幽岩禪寺（所在地は未詳）に住持したとされるから、そのいずれかの幽岩寺に住持したものであろう。

嵩巖師洗については『増集続伝燈録』に「鴻福嵩巖師洗禪師」と名が挙げられているが、なぜか日本中世の宗派図には名が載せられていない。師洗については郷閥や俗姓など事跡は定かでないが、彼が住持した鴻福寺とは台州（浙江省）黄巖県の浮山鴻福禪寺のことを指していると見てよい。この寺にはかつて楊岐派の瞎堂慧遠（仏海禪師）や拙庵德光（仏照禪師）なども住持していることから、黄巖県ではかなり名の通った禅刹であったことが知られる。南宋末期のことながら曹源派の一山一寧（二山国師、妙慈弘濟大師、一二四七一三二七）が幼くして浮山鴻福寺に上山して大慧派の無等恵融（慧融とも）のもとに参学し

た事跡が知られる。⁽²⁷⁾ 師洸は慧開と同門に当たるから、惠融より一代代ほど早く浮山鴻福寺に住持していたことになろう。

竹巖妙印（竹崖とも、一一八七—一二五五）については、すでに触れたごとく大慧派の無文道璨が『無文印』巻五「石霜竹巖印禪師塔銘」と『柳塘外集』巻四「石霜竹崖印禪師塔銘」を撰していることから、かなり詳しい事跡を辿ることができる。妙印は豫章（江西省）進賢の萬氏の出身で、郷里の龍塘寺にて紹曇に師事し、一六歳のときに得度している。行脚して蘇州呉県の靈巖禪寺で師観に参学し、慧開とも親しい道交を結んだものらしい。衡陽（湖南省）南嶽の南臺禪寺に大慧派の無二〇月に招かれて首座として分座説法した後、潭州（湖南省）長沙県西の谷山宝寧禪寺に開堂出世して師観に嗣承香を焚き、その後も高安（江西省）新昌県の洞山普利禪寺や潭州瀏陽県の石霜山崇勝禪寺などに住持して化導を敷いている。宝祐三年（一二五五）八月に妙印は世寿五五歳で示寂しており、石霜山中の紫霞庵に建塔されている。妙印の門人惠隆が道璨のもとを訪ねて塔銘を依頼し、これに応じて道璨は「石霜竹巖印禪師塔銘」を撰している。妙印には四会語を集めた『竹巖和尚語録』といった表題の語録が存したものらしいが、残念ながら現今に伝えられていない。妙印の法嗣には藏主の直翁□円と廬州（安徽省）廬江県の治父山実際禪院（治父寺）に住持した金牛□真がおり、両者の系統が元代禪林へと受け継がれている。

孤峰德秀については『増集統伝燈録』に「興化囊山孤峰德秀禪師」の章が存しているが、記載内容はきわめて少ない。德秀は福州（福建省）連江県の陳氏の出身であり、蘇州呉県の楓橋寒山禪寺で出家得度している。その後、蘇州呉県の万寿報恩光孝禪寺で慧開と同じ頃に師観に参学し、やがて師観の法を嗣いでおり、同門の慧開や妙印とも道交が深かったものらしい。『月林観和尚語録』「頌古」（正統蔵二二〇・二四六c—二四七b）は侍者德秀編であり、語録の巻末には嘉定九年（一二一六）一〇月中澣に澄翠庵の師観が蘇州呉県西の天平山白雲禪寺の住持となった德秀に付与した法語（正統蔵二二〇・二四八c—d）が付録されている。『月林観和尚語録』の序文を陳貴謙に依頼した中心人物も德秀であり、これに應じて陳貴謙は嘉定二年（一二一八）上元日に序文を付している。また陳貴謙が撰した「月林観禪師塔銘」を『月林観和尚語録』に収めて重刊したのも嗣法小師德秀であるから、まさに德秀の努力なくして師観の語録や塔銘は後世に残らなかつたことであろう。その後、德秀は興化府（福建省）莆田県の囊山延福禪院（後の慈寿禪寺）に住持している。法嗣に皖山正凝（止凝とも、一一九一—一二七四）と一衲□戒が存しており、正凝の系統が元代禪林へと受け継がれている。とくに正凝の法嗣である蒙山德異（古筠比丘、一二三一—？）は松江府（江蘇省）青浦県の澱山普光王禪寺に住持しており、德異本『六祖壇経』を編したことで名高く、『蒙山和尚六

道普説』も広く知られている。

無字の公案を参究して師観から印可証明を得る

では、慧開は万寿寺の月林師観のもとに投じて如何なる研鑽をなしていたのか、如何なる機縁で印可証明を受けているのであろうか。万寿寺の師観の席下に連なつた慧開は師観から「無字公案」を与えられて参究しており、『増集続伝燈録』にはその修行研鑽のさまをつぎのように伝えている。

經_三于六年、過無_三入處。乃奮_レ志剋責誓云、若去睡眠、爛_三却我身。每_レ至_三困時、廊下行道、以_レ頭向_三露柱_一磕。一日在_三法座_一立、忽聞_三齋鼓聲_一有_レ省。成_レ偈曰、青天白日一声雷、大地羣生眼豁開、万象森羅齊稽首、須彌踔跳舞_三三臺_一。次日入室、欲_レ通_三所得_一。林遽曰、何処見_三神見_一鬼了也。師便喝。林亦喝。師又喝。自_レ此機語吻合。

この点は『補統高僧伝』においてもほぼ同様であつて、そこにもつぎのように記されている。

六年過無_三入處_一。乃奮_レ自剋責誓云、若去睡眠、爛_三却我身。每_レ至_三困劇時_一、廊下行道、以_レ首触_三露柱_一。一日在_三法座_一立、忽聞_三齋鼓聲_一有_レ省。成_レ偈云、青天白日一声雷、大地羣生眼豁開、万象森羅齊稽首、須彌踔跳舞_三三臺_一。入室通_三所得_一。林叱曰、何得_三見_一神見_レ鬼。師便喝。林亦喝。師又喝。自_レ此機語吻合。

実のところ『増集続伝燈録』や『補統高僧伝』の記事は、慧開自身が語ったことばに基づいてまとめられたものにはかならない。⁽²⁹⁾『無門開和尚語録』巻下「告香普説」において、慧開は自らの修行時代を振り返つて、

山僧昔日在_三先師會中_一、只看_三一箇無字_一、六年下語不_レ得。自發_レ志剋責、我若不_レ明_三此話_一、更去睡眠時、爛_三却我身。纔困時、或廊下行道、將_レ頭去露柱上磕。一日在_三法堂_一立、忽聞_三齋鼓聲_一、便理_三會得_一這話。次日入室、欲_レ通_三所得_一。先師一見便言、見_レ神見_レ鬼了也。先師震_レ威一喝。山僧亦喝。先師又喝。山僧又喝。自_レ此機鋒不_レ讓。⁽³⁰⁾

と門下に集つた修行僧たちに語っており、自ら苦悶に満ちて修行研鑽に明け暮れた日々の過程を回顧している。この点は同じく『無門開和尚語録』巻下「偈頌」に、

師六年拳_三無字_一、一日聞_三齋鼓_一有_レ省。

青天白日一声雷、大地羣生眼豁開、万象森羅齊稽首、須彌踔跳舞_三三臺_一。⁽³¹⁾

無門慧開の生涯と『無門関』(一) (佐藤)

という一偈も収められており、慧開が悟道した際に詠じた七言四句の偈頌が載せられている。この慧開自身が「告香普説」で語り、「偈頌」で記したことばを通して、その間の経緯を鮮明に知ることができよう。慧開が万寿寺の師観のもとに投じた具体的な年時は定かでないが、門下の一員となった慧開に対して師観は「無字公案」を初関として参究せしめている。慧開は師観の会下で六年間にわたって「趙州無字」の古則公案を参究していたが、何ら悟入するところもなく、師観に対して下語することすらできずにいたものらしく、自問自答の苦しい日々がつづいている。あまりの菌痒さに発奮した慧開は「我れ若し此の話を明らめずば、更去いて睡眠する時、我が身を爛却せよ」と心に誓ったとされる。そんな中で疲れ果てて睡眠魔に襲われたときに慧開は僧堂の廊下を行道経行し、頭を露柱に打つけて自らを奮い立たせていたと述懐している。そうしたある日、法堂の辺りに立っていたとき、慧開は斎鼓の音が鳴り響くのを聞いた瞬間に「趙州無字」の公案を会得して省悟したと記されている。このとき「師、六年にわたり無字を挙し、一日、斎鼓を聞きて省有り」と題して、

青天白日、一声の雷。大地の羣生、眼は豁開す。万象森羅、斉しく稽首し、須彌は蹕跳して三臺を舞う。

という一偈を慧開は自ら詠じたことが知られる。自己の悟りを青天の霹靂に擬え、大地有情すべての眼が開けたと述べている点などは、釈迦牟尼仏が六年の苦行を経て禅定に入り、一見明星して成道して「大地有情、同時成道」と語った因縁とその発想を同じくするものであろう。森羅万象すべてのものが等しく慧開の悟りを讃えて頭を下げ、須弥山までもが飛び跳ねて三臺を舞っていると詠っている。この偈頌には六年の歳月を経て漸くにして悟道した慧開の晴れがましい歓喜の心情が吐露されているといつてよい。後に『無門関』を編集した際、慧開は「趙州狗子」と題して第一則に無字の公案を載せている。

当時の江南禅林においては、臨済宗や曹洞宗を問わず学人が悟道した際には時を置かず師匠のもとに赴いて自己の見地が果たして正しいのか否か、点検証明を受けるのが常であった。慧開の場合、悟道した翌日に師観の丈室（方丈）に入室しており、自ら悟った境涯を師観に申し述べて印可証明を得ようと試みている。このとき師観は慧開を一見するなり、すぐさま「神を見、鬼を見了われり」と言い、大きく一喝している。「神を見、鬼を見る」とは鬼神を見ているようだ、物の怪に取り憑かれたように見えるといった意である。このとき慧開は師観の一喝に呼応するかのごとく、直ちに同じように一喝している。師観がすぐさま再び一喝すると、慧開もさらに一喝を下しており、これより鬼神が消え失せて慧開の機鋒は師観に匹敵したと伝えられる。いわば、師観との問答商量によって慧開は真に悟境を深めることができたのであり、これによって印可証明を得て

いるわけである。また慧開は『無門開和尚語録』の「告香普説」の冒頭において、

靈山密付、黄葉止啼。少室親伝、望梅止渴。乃至德山棒、臨濟喝、雪峰靴、道吾舞、笏、秘魔擎、叉、禾山打鼓、清原垂足、天龍豎指、尽是弄獼猴。底閑家具。到者裏、総用不著。雖然如是、事無一向、不免随例開箇𧔔角生姜鋪子。(已統藏二二〇・二五八 a)

と語っており、「趙州無字」の古則こそ入っていないが、多くの公案や接化の手段を獼猴(猿)を弄ぶ閑家具にすぎないと規定している。ちなみにこのとき慧開が取り上げた公案の中に「天龍豎指」すなわち「天龍一指頭禪」の古則も含まれている。

杭州錢塘県に天龍庵を創建する

月林師観がいまだ存命中に慧開がなしたできごととして、自ら郷里杭州に到って西湖の周辺に天龍庵を創建したという記事が伝えられている。慧開が示寂して間もない頃に刊行された『咸淳臨安志』卷八二「寺観八」の「菴(城内外)」に、

天龍庵、在昭慶教場雲洞後山。嘉定五年、禪師慧開、見山間有紫氣如蓋、遂結菴其処。嗣秀王師彌、捐金為増広之。楼參政鑰、書天龍二大字。

という記事が残されている。この記載によれば、杭州錢塘県の昭慶律寺の雲洞後山に天龍庵という草庵が存していたことが知られ、この天龍庵は嘉定五年(一二二二)に慧開がこの地を訪れて山間に紫の氣が漂っているのを見て草庵を結んだのに始まると伝えられている。しかもその直後に宋室の趙師彌(嗣秀王)が私財を喜捨して天龍庵の堂宇を拡張造営し、参知政事の楼鑰(字は人防、攻媿主人、一一三七—一二二三)が庵の額として「天龍」の二大字を揮毫したというのである。この記事は慧開が示寂した直後に刊行された『咸淳臨安志』の記事であるだけに、きわめて信憑性が高いものと見られる。慧開は師観のもとで参学していた折に諸方行脚したか郷里杭州に帰省することがあり、その間に西湖に臨む絶景の地に草庵を結ぶ機会が存したものであろう。

しかも雲洞とは後に慧開が開山始祖に迎えられる靈洞山護国仁王禪寺の地のことと見られ、慧開が早くから杭州錢塘県の地に天龍庵を結んでいたことが窺われる。楼鑰が七七歳で逝去したのは嘉定六年(一二二三)のことであるから、彼が「天龍」の二大字を揮毫したとすれば、嘉定五年か同六年に限られることとなり、慧開の三〇歳前後のできごととなる。ただし、状

況からすると慧開がこのとき天龍庵に留まっていたのは短期のことと見られ、その後は再び蘇州さらに湖州にて師観に参随していたものと見てよいであろう。

かつて慧開は同じ杭州の天龍寺に出家していたわけであるが、慧開にとって天龍の名は「趙州無字」の古則とともに重要な「天龍一指頭禪」ゆかりの古刹を意味している。慧開がなぜ天龍寺内に天龍庵を創建しなかったのかは定かでないが、郷里杭州に寄せる慕情のごときものが慧開には深かったものと見られる。

月林師観が示寂して『月林観和尚語録』が編纂される

その後、師観は晩年に湖州の烏回山密嚴禪寺（烏回寺）の住持に迎えられているが、清の道光九年（一八二九）に刊行された『武康県志』巻一一「寺観」の「烏回禪寺」の項に、

烏回禪寺、在_二県北二里烏回山南麓_一。始名_三崇德密嚴禪院_一。紹興七年、太師忠靖公邢孝揚建、以奉_三懿節邢皇后祠賜額_一、泉南寺良範禪師開山。元大德間、笑隱訢禪師住持後、娶_三於兵_一。明洪武十九年、僧平仲重建。復廢、国朝乾隆十二年、知県劉守成重修。邢公旧碑尚在_二庭際_一、今僅存_三数字_一。寺西有_二月林禪師塔_一。

と記されており、この寺の大きな変遷が知られる。南宋初代皇帝高宗（趙構、一一〇七—一一八七、在位は一一二七—一二六二）の正室で金国の捕虜となった邢秉懿（憲節皇后、嘉国夫人、一一〇六—一一三九）を奉じて紹興七年（一一三七）に武康県北二里の烏回山の南麓に伽藍が創建されており、はじめ崇德密嚴禪院（崇福密嚴禪院とも）と称し、開山には黄龍派の唯庵良範が迎えられている。師観が烏回寺に住持したのは創建から八〇年ほどを経た時期であり、「月林観禪師塔銘」によれば、

後住_三烏回_一、時已_レ示疾。日猶再鼓入室、且曰、桂花開時吾行矣。俾_三其徒預結_二夏制_一、已而桂果盛開。晨興集_レ衆普説、跏趺坐深定。至_二夜一鼓_一、顧_二左右_一曰、釈迦老子如_レ是、吾亦如_レ是。侍僧請_レ留_レ偈、書已擲_レ筆而行。嘉定丁丑四月十三日也。閱_レ世七十五。坐五十一夏。闍維煙霧結如_二臺蓋_一、舍利無數、皆成_二五色_一。其徒即_二寺之西壟_一、塔以藏_二其骨_一。（正統藏二二〇・二四九d）

と記されており、烏回寺に住持した当初から、師観はすでに病を併発していたものらしい。嘉定一〇年（一二二七）四月一三日に月林師観が世寿七五歳で示寂しているが、示寂前後の状況が「月林観禪師塔銘」にまとめられている。

また『月林観和尚語録』の侍者恵開編「住湖州烏回山密嚴禪寺語録」の末尾に、

十三日参前入室罷就_レ座、再鳴_レ鼓普説。衆集定、師拈_二起拄杖_一云、有_二拄杖_一与_二拄杖_一、無_二拄杖_一奪_二拄杖_一。衆中莫_レ有_二会底_一、出来道看。衆無_レ对。擲_二下拄杖_一云、高著_レ眼。師於_レ是端坐、至_二更尽_一、遂顧_二左右_一曰、釈迦老子也如_レ是、吾亦如_レ是。侍僧請_レ留_レ偈。師即書云、来時無_レ蹤、去時無_レ跡、七十五年、青天霹靂。書罷、放_レ筆而逝。(己統藏一二〇・二四六c)

とあり、師観が示寂する当日の状況が克明に記されている。いよいよ死期が近づいた頃に師観は「桂花の開く時、吾れ行かん」と門下の学人たちに告げたとされる。しかも烏回寺では師観の意向でこの年の夏安居を四月一五日の結夏日より早く執り行なったものらしく、桂花の花が開花した四月一三日に師観は入室罷に結跏趺坐して深い禅定に入った後、一山の修行僧たちを集めて普説しており、その内容が「住湖州烏回山密嚴禪寺語録」の末尾に載せられているわけである。侍僧が遺偈を請うと、師観は「来たる時も蹤無く、去る時も跡無し、七十五年、青天霹靂す」という七言四句を書き終わって筆をほとりと落とし、世寿七五歳、法臘五一夏で示寂したとされる。「住湖州烏回山密嚴禪寺語録」は慧開(恵開)が侍者として編集した上堂語であるから、ここにいう侍僧が侍者のことを意味するのであれば、このとき本師師観に遺偈を請うたのは侍者の慧開自身であったことになる。

このように慧開は密嚴寺の師観のもとで侍者を勤め、師観の最期を看取ったわけであり、『無門開和尚語録』巻下「告香普説」において先師師観の示寂について触れ、

先師円寂後、陳提刑諱貴謙作_二喪主_一。臨_レ時令_レ為_二先師掛真_一、不_レ容_二辭避_一。山僧捧_二起真_一云、老賊一喝、虚空迸裂、儂家当下、如_二桶底脱_一。連伸_二三拜_一、納_二尽敗缺_一。這些怨恨、怎生消滅。(己統藏一二〇・二五九c)

と自らそのときの掛真仏事の様子について語っている。「告香普説」によれば、師観が示寂した際に喪主を勤めたのは提刑の陳貴謙であり、秉炬の導師を勤めた禅者が誰であったのかは定かでないが、葬儀に際して慧開はやむなく掛真の役を執行したことが知られる。慧開は本師師観の頂相(肖像画)を掛ける掛真仏事において、

山僧、真を捧げ起こして云く、「老賊の一喝、虚空迸裂す。儂家、当下に桶底の脱するが如し。連りに三拝を伸べ、敗缺を納れ尽くす。這些の怨恨、怎生にか消滅せん」と。

という法語を語っており、師観の悪辣な学人接化を逆説的に表現して称え、師観に対して全面的に身を垂れて育成の師恩に報いんとしている。「老賊一喝」とはおそらくかつて慧開自身が大悟の折りに師観と戦わした一喝の応酬を振り返った感慨で

あろう。ときに慧開は三五歳の円熟期に当たっており、この後、師観の法を嗣いだ高弟として開堂出世し、江南禅林に化導接化を敷いていくことになる。その後、師観の遺体を荼毘に付すと、多くの五色に輝く舍利靈骨が得られ、門人たちは烏回寺の西壘に師観の墓塔を建てて遺骨を収めている。史料的には定かでないが、この師観の納骨安位の仏事に際しても、門人の一人として慧開も立ち会っていたことであろう。『武康県志』によれば、清末においても烏回寺の西に月林禪師塔が存続していたことが記されている。「月林観禪師塔銘」も烏回寺の一隅に立石されたわけであるから、おそらく月林禪師塔に沿うかたちで存したことであろう。

湖州武康県の報因佑慈禪寺に開堂出世する

師観が示寂した翌年、嘉定十一年（一二二八）に慧開は湖州（浙江省）すなわち安吉州の報因佑慈禪寺に開堂出世している。『増集続伝燈録』では「嘉定十一年、出^二世安吉報国^一」とあり、『補続高僧伝』でも「嘉定間、出^二世安吉報国^一」と記されている。ただし、安吉（湖州）の報国に出世したとするが、実際には報国寺ではなく報因寺の誤りと見てよいであろう。『無門開和尚語録』巻上には侍者普敬録「無門開和尚住湖州報因禪寺語録（月林和尚開山、師為^二第二代^一）」（正統蔵一二〇・二五〇d）（二五一a）が収められている。このとき侍者を勤めていた普敬とは『仏祖正伝宗派図』や『正誤仏祖正伝宗派図』三に慧開の法嗣として「上藍直指□敬」と載る人であろう。直指普敬は後に慧開の法を嗣いで洪州（江西省）隆興府新建県の上藍禪院（開元寺）に住持している。

慧開は嘉定十一年五月九日に湖州の報因禪寺に開堂出世しているが、この寺はもともと本師師観が開山に迎えられた禅刹である。『月林観和尚語録』には侍者有宗編「開山湖州報因佑慈禪寺語録」（正統蔵一二〇・二四四c）（二四五a）が収められており、師観が湖州の報因佑慈禪寺の開山祖師となったことが知られ、慧開は師席を継いで報因寺の第二代に就任しているわけである。『月林観和尚語録』巻末の「月林観禪師塔銘」によれば、

退^二処西湖、為^二終焉計^一。李開府^二妻^一觀^二寺於上柏^一。曰^二報因^一。具^二衣冠^一造^レ師、固請為^レ之開山。（正統蔵一二〇・二四九c）

と記されているから、師観が蘇州（平江府）呉県の万寿報恩光孝禪寺の住持職を退き、杭州西湖の湖畔に閑居して終焉の計をなさんとしていたとき、開府の李妻が湖州武康県の上柏に創建した報因寺の開山に拝請されていることが知られる。⁽³³⁾この点は

慧開が『無門関』の冒頭の序文で、自らの肩書きを「慈懿皇后功德報因佑慈禪寺前住持伝法臣僧慧開」(大正蔵四八・二九二b)と記しているから、報因寺が慈懿皇后ゆかりの功德院として創建されているものらしい。慈懿皇后とは南宋第三代皇帝の光宗(趙惇、一一四七―一二〇〇、在位は一一八九―一九四)の皇后であつた李鳳娘(寿仁太上皇后、一一四五―一二〇〇)という人であり、この皇后を祀るために建てられたのが報因佑慈禪寺にはかならない。李鳳娘は光宗のもとで専横をなした女性とされているが、彼女を祀るために建てられた報因寺はまさに宋室ゆかりの重要な禪寺の一つとして機能していたことになるう。

報因寺の語録では「師於嘉定十一年五月初九日入院」につづいて「指三門」「仏殿」「法座」という入院法語が存しているが、その後は「上堂」「上堂」「上堂」とわずかに三上堂を載せているにすぎない。報因寺の上堂で慧開は「山僧」「報因」と自称している。慧開は「法座」において「分明拈出薰向爐中、奉為兩住平江万寿後住烏回先師月林和尚、非図報徳酬恩、且要通相鈍置」(正統蔵二二〇・二五〇d)と述べており、嗣承香を師観に焚いて師恩に報いている。このとき慧開は先師師観の肩書きを「兩たび平江の万寿に住し、後に烏回に住する先師月林和尚」と述べているから、師観が最も拠点とした禪寺が蘇州呉県の万寿報恩光孝禪寺(再住)と湖州武康県の烏回山密嚴禪寺であつたことが知られよう。慧開はつづいて「昔年曾向山中去、千手大悲攔不住。今朝又向山中來、優曇華向半天開。一來一去、歴歴分明。今日昔年、頭頭合轍」と語っており、昔年の修行時代を振り返つて師観の慈悲行に報いるとともに、住山して接化に臨む意気込みを学人に説示している。さらに「法座」の最後において「茅菴艸舍住山深、無奈檀那錯訪尋、了却先師未了底、惡声從此滿叢林」(正統蔵二二〇・二五一a)と述べていることから、報因寺の伽藍が山中に存し、いまだ大利とまではなっていなかったらしい消息も窺われる⁽³⁵⁾。

慧開は報因寺における末尾の「上堂」で五祖法演の示衆を取り上げた後に、

師云、大衆、演師祖慈麼説話、意在於何。且道、今日報因、与三水雲相会、声声相応一句、又作麼生。畢竟水須朝海去、到頭雲定覓山歸。(正統蔵二二〇・二五一a)

と述べている。この上堂は退院上堂ではないと見られるが、水がやがて海に注ぎ、雲がいつか山に帰るときさまを語っており、雲のごとく流れ水のごとく行く「雲自水由」のありようを理想としていたことが窺われる。

温州江心寺の首座として『無門関』を刊行する

慧開が師観ゆかりの報因寺に住持していた期間は定かでないが、およそ一〇年近くを経た頃に報因寺の住持職を退いているものらしい。退院した理由は明確ではないが、あるいは報因寺が寧宗の母親である慈懿皇后李鳳娘ゆかりの禪刹であったことから、寧宗が嘉定一七年（一二二四）閏八月三日に崩御した直後、慧開も報因寺の住持を退いているのかも知れない。ただ、状況的には報因寺を退院した第一の理由として、暫し住持の要職を退いて自らの頌古を作成したいという願望があったためと見られる。慧開の頌古とはほかならぬ『無門関』のことであり、当時の江南禅林の風潮として古則公案に対して自らの頌賛の偈頌を添える頌古作成が諸禪者によって盛んに行なわれている。おそらく本師師観のもとで印可証明を得て以降、慧開は折りに触れて祖師の古則公案に対して自らの境涯で頌賛を作成していたものと見られ、それらをさらに拡充して一書の頌古集に纏めんとして煩雑な住持職を退いたものではなからうか。

『無門関』は紹定年間（一二三二—一二三三）の前半に慧開が首座として拈提した頌古集であり、これに先立つて慧開は自らの頌古を作成するために報因寺の住持職を退いているものらしい。『無門関』は「参学比丘彌衍・宗紹編」とあり、参学比丘の彌衍と宗紹によって編集されており、この二人の編者についてはほとんど事跡が辿れないが、慧開にとつてかなり初期の参学門人ということになろう。おそらく両者は慧開が報因寺に住持している頃から参学しており、報因寺を退院して後も引きつづき慧開に随侍していたものであろう。慧開は『無門関』の末尾に跋文として、つぎのような一文を載せている。

従上仏祖、垂示機縁、捩欵結案、初無剩語。掲翻腦蓋、露出眼睛、肯要諸人直下承当、不從佗覓。若是通方上士、纔聞「举著」便知「落处」。了無門戸可入、亦無階級可升。掉臂度関、不問関吏。豈不見、玄沙道、無門解脱之門、無意道人之意。又白雲道、明明知道、只是者箇、為甚麼「透不過」。恁麼說話、也是赤土搽牛欄。若透「得無門関」、早是鈍「置無門」。若透「不得無門関」、亦乃辜「負自己」。所謂、涅槃心易曉、差別智難明。明「得差別智」、家國自安寧。

皆紹定改元解制前五日、楊岐八世孫無門比丘慧開謹識。（大正藏四八・二九九a）

従上の仏祖、垂示の機縁は、欵に捩りて案を結し、初めより剩語無し。脳蓋を掲翻し、眼睛を露出し、肯えて諸人の直下に承当し佗に従いて覓めざらんことを要す。若し是れ通方の上士ならば、纔かに举著するを聞きて、便ち落处を知らん。了に門戸の入るべき無く、

亦た階級の升るべき無し。臂を掉いて関を度り、関吏を問わず。豈に見ずや、玄沙道く、「無門は解脱の門、無意は道人の意」と。又た白雲道く、「明明として知る、只だ是れ者箇、甚麼と為てか透り過ぎる」と。恁麼の説話、也た是れ赤土もて牛糞を揉る。若し無門関を透得せば、早や是れ無門を鈍置せん。若し無門関を透り得ずんば、亦た乃ち自己を辜負せん。所謂る、「涅槃心は曉め易く、差別智は明難し」と。差別智を明め得ば、家國自ずから安寧ならん。

時に紹定改元解制の前五日、楊岐八世の孫、無門比丘慧開、謹んで識す。

この跋文を慧開が記したのは紹定元年（一二二八）七月一日（解制前五日）のことであり、このとき慧開は自ら「楊岐八世の孫」という肩書きを用いている。雪峰下の玄沙師備（謝三郎、宗一大師、八三五—九〇八）が「無門解脱之門、無意道人之意」と述べたするのは『福州玄沙宗一大師広録』巻中の「上堂」に、

仏道閑曠、無_レ有_二程途_一、無門解脱之門、無意為人之意。不_レ在_二三際_一、故不_レ可_二昇沈_一。建立乖_レ真、非_レ属_二造化_一。（『正統蔵一二六・一九〇 a』）

とあることはを受けている。玄沙師備は無門こそが本當の解脱の門であり、無意こそが真の道人であると語っており、慧開が（³⁶）無門を道号として用いて『無門関』を提唱するに至った背景に、あるいはこの師備の語句が存したのかも知れない。また楊岐下の白雲守端（一〇二五—一〇七二）が述べた「明明知道、只是者箇、為_二甚麼_一透不_レ過」の語は『白雲端和尚語録』巻二「舒州白雲山海会禅院語録」の「上堂」に、

明明知道、只是這箇、為_二什麼_一透不_レ過。只為_二見_二人開_レ口時_一、便喚作_二良久默然_上」（『正統蔵二二〇・二二二 c』）

とあることばを受けている。守端は「はつきりと分かっているのに、これだけをどうして透り切れないのか」と迫っているが、慧開もこの語句を「無字の関門は常に開け広げられているのに、なぜ、そこを通過することができないのか」と解して学人に喚起を促しているわけであらう。

同じく『無門関』の冒頭には慧開が書いた表文が残されており、つぎのように記されている。

紹定二年正月初五日、恭遇_二天基聖節_一。臣僧慧開、預_二於_二元年十二月初五日_一、印_下行拈_二提仏祖機縁_上四十八則、祝_二延今上皇帝聖躬万歳_一。万歳万万歳。皇帝陛下、恭願聖明齊_二日月_一、叙_二筭等_二乾坤_一、八方歌_二有道之君_一、四海樂_二無為之化_一。

慈懿皇后功德報因佑慈禅寺前住持伝法臣僧慧開謹言。（大正蔵四八・二九二 b）

紹定二年正月初五日、恭しく天基の聖節に遇う。臣僧慧開、預め元年十二月初五日に於いて、仏祖の機縁を拈提せる四十八則を印行し、今上皇帝の聖躬の万歳万歳万歳を祝延す。皇帝陛下、恭しく願わくは聖明は日月に齊しく、叡算は乾坤に等しく、八方は有道の君を歌い、四海は無為の化を楽しまんことを。

慈懿皇后が功德の報因佑慈禪寺に前に住持せる伝法臣僧慧開、謹しんで言す。

この表文は紹定二年（一二二九）正月五日の天基節すなわち理宗の誕辰日に書されており、新たな今上皇帝である理宗の聖寿無窮と宋朝国家の泰平無為を祈願している。このとき慧開はすでに四七歳という円熟期に当たっており、前年の紹定元年（一二二八）一二月五日に仏祖の機縁四八則を拈提した『無門関』を完成させ、年が改まった直後のに天基節を期して『無門関』の序文を揮毫しているわけである。このとき慧開は自ら肩書きに「慈懿皇后功德報因佑慈禪寺前住持伝法臣僧」と記しているが、すでに触れたごとく慈懿皇后は先帝寧宗の生母であり、その功德寺である報因佑慈禪寺の前住を勤めたことをあえて公言しつつ、しかも自ら理宗に対して「臣僧」としての立場を強調しているのは興味深い。

頌古集を作るのは南宋代に江南禅林に流行していたのであって、松源派の虚堂智愚などにも頌古集が存しており、『禅宗頌古聯珠通集』を閲覧しても南宋代から元代の禅者たちの多くに頌古の拈提が存していることが知られる。慧開の『無門関』もそうした頌古集編纂の一環であって、慧開としては自身の頌古に『無門関』という表題を付けて独自性を江南禅林に公表したかったものと解されよう。

さらに同じく慧開は『無門関』の冒頭に「禅宗無門関」と題して、

仏語心為宗、無門為法門。既是無門、且作麼生透。豈不見道、從門入者不_レ是家珍、從縁得者始終成壞。恁麼說話、大似_二無風起_一浪好肉剗_レ瘡。何況滯_二言句_一覓_二解會_一。掉_レ棒打_レ月、隔_レ靴爬_レ痒、有_二甚交涉_一。慧開、紹定戊子夏、首_二衆于東嘉龍翔_一、因_二衲子請益_一、遂將_二古人公案_一作_二敲_レ門瓦子_一、随_レ機引_二導學者_一。竟爾抄録、不_レ覺成_二集_一。初不_二以前後_一叙列_レ、共成_二四十八則_一、通曰_二無門関_一。若是箇漢、不_レ顧_二危亡_一、單刀直入。八臂那吒、攔_レ他不_レ住。縱使西天四七東土二三、只得_二望_レ風乞_レ命_一。設或躊躇、也似_二隔_レ窓看_二馬騎_一、貶_二得眼_一來、早已蹉過。頌曰、

大道無_レ門、千差有_レ路、透_二得此関_一、乾坤独歩。（大正蔵四八・二九二b）

仏語心を宗と為し、無門を法門と為す。既に是れ無門なれば、且らく作麼生か透らん。豈に道うことを見ずや、「門より入る者は是れ家

珍にあらず、縁より得る者は始終成壞す」と。恁麼の說話、大いに風無くして浪起こり、好肉に瘡を剗るに似たり。何ぞ況んや言句に滞りて解会を覓むるをや。棒を掉いて月を打ち、靴を隔てて痒きを爬く、甚の交渉か有らん。慧開、紹定戊子の夏、衆に東嘉の龍翔に首たり、衲子の請益するに因りて、遂に古人の公案を將て門を敲く瓦子と作し、機に隨いて學者を引導す。竟爾に抄録するに、覚えず集を成す。初めより前後を以て叙列せず、共に四十八則と成り、通じて『無門関』と曰う。若し是れ箇の漢ならば、危亡を顧みず、單刀直入せん。八臂の那吒、他を攔り住ず。縦使い西天の四七、東土の二三も、只だ風を望んで命を乞うことを得んのみ。設或し躊躇せば、也た窓を隔てて馬騎を看るに似て、眼を眈眈し來たらば早や已に蹉過せん。頌に曰く、

大道に門無し、千差に路有り。此の関を透得せば、乾坤に独歩せん。

という自序を残している。これらの序跋を読み解くことによつて『無門関』をめぐる慧開の動向がある程度は判明しよう。湖州武康県の報因佑慈禪寺の住持を退いた後、慧開は紹定元年（一二二八）夏に温州（浙江省）永嘉県の江心山龍翔禪寺に到つて首座となり、修行僧たちの請益を受けて古人の古則公案四十八則を拈提して『無門関』一卷を著している。温州の龍翔寺は南宋初期に曹洞宗の真歇清了（寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五一）を禪刹開山としており、禪宗十刹の第六位に列した名刹であるが、このとき龍翔寺の住持を勤めていたのが如何なる禪者であつたのかは定かでない。⁽³⁷⁾先に示した慧開の跋文は紹定元年七月一〇日に著されていたわけであるが、これは慧開が首座として永嘉県の龍翔寺で記したものと見てよいであらう。この序文においても慧開は「無門を法門と為す」とか「大道に門無し」と記しており、無門のありようを第一とする『無門関』撰述の意義を逆説的に語っている。⁽³⁸⁾

台州瑞巖寺の無量宗寿のもとで『無門関』を提唱する

ところで、『無門関』の末尾にはさらに大慧派の無量宗寿が詠じた「黄龍三関」の古則と頌古を載せており、

我手何_レ似_レ仏手。摸_レ得_レ枕頭背後、不_レ覺_レ大笑呵呵、元來通身是手。

我脚何_レ似_レ驢脚。未_レ拏_レ歩時踏著、一_レ任四海橫行、倒跨_レ楊岐三脚。

人人有_レ箇生縁。各各透_レ徹機先、那吒析_レ骨還_レ父、五祖豈藉_レ爺縁。

仏手驢脚生縁。非_レ仏非_レ道非_レ禪、莫_レ怪無門関陰、結_レ尽衲子深冤。

無門慧開の生涯と『無門関』（一）（佐藤）

瑞巖近日有「無門」掇「向繩床」判「古今」。凡聖路頭俱截斷、幾多蟠蟄起「雷音」。

請「無門首座」立僧、山偈奉「謝」。紹定庚寅季春、無量宗壽書。（大正藏四八・二九九b）

という一文が付されている。これは瑞巖寺の住持であった宗寿が慧開に立僧首座を請うて『無門関』の提唱を願った際の感謝の一文にはかならない。このとき宗寿は黄龍慧南の「黄龍三関」の一々の語句に対し、それぞれ六言三句の頌古を付け足している。宗寿がこの一文を記したのは紹定三年（一二三〇）季春三月のことであり、七言四句の偈頌の冒頭に「瑞巖」とあるのは宗寿が住持していた寺院の名称に基づいた自称である。瑞巖寺といえは浙江地内に二ヶ寺が存しており、一つは明州定海県（後の寧波府鎮海県）の瑞巖開善禪寺であり、いま一つは台州黄巖県の瑞巖浄土禪院である。このとき慧開は瑞巖寺の宗寿のもとに招かれて首座として立僧したことが知られるが、宗寿が住持していた瑞巖寺とはこの二ヶ寺の瑞巖寺の中で何れを指しているのであらうか。『無門関』は紹定二年一月に慧開の自序を載せて編集刊行されているから、宗寿は刊行された『無門関』を実際に見て慧開を瑞巖寺の首座に招いたものと見られ、慧開が瑞巖寺の修行僧たちを前に『無門関』を提唱した際、宗寿はこれに寄せて謝意を表しているわけであらう。あるいは紹定二年に『無門関』が刊行された後、さらに紹定三年以降にも瑞巖寺の宗寿が記した「黄龍三関」の頌古と謝語を付加した『無門関』が再版されているのかも知れない。

宗寿といえは南宋代の清規の一つ『無量寿禪師入衆日用清規』（正統蔵一一・四七二a～四七四b）を編集したことで名高く、大慧派の拙庵徳光（東庵、仏照禪師、一一二一～一二〇三）の法孫に当たっている。その系譜は大慧宗杲―拙庵徳光―秀巖師瑞―無量宗寿と次第しており、看話禪の大成者大慧宗杲（妙喜、大慧普覚禪師、一〇八九―一一六三）の法曾孫ということになる。『枯崖和尚漫録』巻中「無量寿禪師」の項によれば、

無量寿禪師、撫州人。答「太師史衛王」云、仏法在「一切処」、奏「事書」判処、著衣喫飯処、致「君沢」民処、納「士用」賢処、第一不「可」擬「心」尋覓。纔是如「斯」、又不「得」也。嘗首「衆鄴陽刁峰」。太師以「京口金山」招「之」不「出」、即遁「于隆興感山」。晚年始赴「台之瑞巖」請。是亦不「失」為「比丘之大体」者矣。（正統蔵一四八・八六a～b）

とあり、宗寿について簡略な事跡が知られる。宗寿は撫州（江西省）の人であり、大慧派の秀巖師瑞（？―一二三三）に参じて法を嗣いでいる。その後、宗寿は江西の鄱陽湖に臨む信州（江西省）弋陽県南の刁峰亀峰禪寺（千亀峰）で首座となり、嘉定二年（一二〇九）に『無量寿禪師入衆日用清規』一卷を撰述している。『枯崖和尚漫録』によれば、宗寿は太師の史弥遠（衛王）

の帰依を受けていたことが知られ、仏法が官僚としての職務や生活の一切処にも在ることを説示しており、このため史弥遠は鎮江府（江蘇省）丹徒県（京口）の金山龍游禪寺の住持に宗寿を招いたが、宗寿はその要請を断つて洪州隆興府（江西省）豊城縣宣風郷の感山海慧禪寺に通棲している。『枯崖和尚漫録』によれば「晩年、始めて台の瑞巖の請に赴く」とあるから、晩年に至って漸く台州黄巖県の瑞巖浄土禪院の要請を受けて住持として赴任したことを特記している。

一方、『続伝燈録』卷三五「明州瑞岩寿禪師」の章（大正蔵五・七〇八c）や『増集続伝燈録』卷二「四明瑞巖無量寿禪師」の章（正統蔵一四二・三八九c-d）によれば、宗寿が住持した瑞巖寺は台州瑞巖寺ではなく、明州定海県の瑞巖開善禪寺であったことを伝えている。宗寿が住持したのがそのいずれの瑞巖寺であったのかは即断し難いが、状況的には明代初期に編纂された『続伝燈録』『増集続伝燈録』の記事より南宋末期に編纂された『枯崖和尚漫録』の内容を信ずるべきであろうか。

この点、注目すべきは『無文印』卷一二「祭文」や『柳塘外集』卷四に「孚蔵主祭_三寿無量塔」が収められており、孚蔵主という門人が宗寿の墓塔を祀る際に無文道璨が撰した祭文が載せられている。「孚蔵主祭_三寿無量塔」には「挈挈遠来_三瑞峯之下_一、_三拭其題碑_一、_三樹其宰木_一とあり、輓峯とは台州瑞巖寺に存する峰の名を指している。台州瑞巖寺といえは「瑞巖主人公」の古則で有名な青原下の瑞巖師彦（空照禪師）が唐末五代に創建したとされる名刹であり、『無門関』第一二則に「巖喚主人」が存する。状況からして宗寿が台州瑞巖寺に住持したことが明らかとなり、当時、台州瑞巖寺の住持職は曹洞宗真歇派の長翁如浄から楊岐派の高原祖泉（？一二二九）を経て、紹定三年の頃は太慧派の宗寿が住持として継承していたことになる⁴⁰。したがって、慧開は温州永嘉県の江心山龍翔寺で首座を勤めて『無門関』を刊行した後、近接する台州黄巖県の瑞巖浄土禪院の宗寿のもとに招かれ、再び首座として学人らのために『無門関』を提唱していることになる。

註

（一）この点、幸いに『禪宗頌古聯珠通集』四〇卷には「続集」の

箇所に「無門関」の詠じた頌古がかなり収められており、元の延祐四年（一三一七）に越州（浙江省）山陰県の天衣万寿禪寺で嗣承未詳の魯庵普会が『禪宗頌古聯珠通集』の「続集」を編

集した頃までは少なくとも『無門関』が江南禪林において十分に閲覧可能な頌古集として流通していたものらしい。

（二）このほか『西湖志纂』卷七「北山勝蹟上」の「黄龍洞」「護国仁王寺」の項に、

黄龍洞、在_三棲霞嶺後。「名勝志」宋淳祐間、有_三僧慧開「字無

門、説「法具興之黃龍山、後卓錫於此。有石鎔筍不_レ合如_レ砥。忽然出_レ泉、色紺而冽。人以為「龍隨錫至」、故名「黃龍洞」。

護国仁王寺、即黃龍洞在「掃帚塢」。「西湖遊覽志」宋淳祐間、經略使孟珙建、賜「仁王額」、延「高僧慧開」居_レ之。七年旱、召_レ開祈_レ雨。雨隨至。問「何時霑_レ足」、開對以「寂然不_レ動、感而遂通、是夕大雨。嗣是無_レ雨輒禱、禱輒_レ應。遂封「黃龍」、為「靈濟侯」、賜_レ額曰「護國龍祠」。元至正燬、明洪武初、僧祖吉重建。其東有「黃山橋」。塢内旧有「天龍菴・永安院・西靖宮」並廢。

とあり、ほぼ『西湖遊覽志』の記事を受けている。ちなみに護国仁王寺跡は現在在杭州芸術大学の敷地となっており、大学校舎が建てられている。

(3)『浙江通志』卷一九八「仙釈二」の「慧開」にも『西天目志』に依るとして、

慧開与「石霜」同参。作「補衲・看經二偈。自「黃龍山」挾_レ龍來、無門洞龍每蜿_レ蜒松上、禱_レ雨輒_レ應。孟珙・吳潛開_レ於朝、召_レ對所致_レ雨者曰、寂然不_レ動、感而遂通。賜_レ「金紋伽黎」。後身為「明本」。

と記されており、これは『康熙錢塘県志』より簡略に慧開の項をまとめたものである。

(4)宮内庁書陵部編刊『図書寮典籍解題（漢籍篇）』（昭和三十五年

三月）の「無門語録」（一九七頁）の箇所、川瀬一馬『五山版の研究（上巻）』（日本古書籍商協会、昭和四十五年三月）の「無門和尚語録」（四五二頁〜四五三頁）の箇所。椎名宏雄『五山版中国禪籍叢刊（第七巻語録2）』の「六「無門語録」不分巻一冊」の解題（五四六頁〜五四七頁）などを参照。

(5)元禄五年版『無門開和尚語録』二巻は駒澤大学図書館の忽滑谷文庫に所蔵されており、この版元からは寛文・延宝期に『無門関』『無門関鈔』が刊行されている。矢島元亮『徳川時代出版社出版物集覧（続編）』（昭和五十一年二月）の八九頁cを参照。

(6)卍山道白の跋文は『鷹峯卍山和尚広録』巻二九「序」に、

無門禪師語録序。

碧巖集之後、評_二唱公案_一甚多。而不_レ墮_二解路_一。発_二明宗旨_一者、独無門開公乎。予嘗閱_二無門関四十八則_一、知_二其然_一矣。今復得_二此諸会語録_一、遮_二我睡餘之眼_一、則眸子為_レ之活動、巖電為_レ之閃爍。蓋以_二其痛快_一破_レ寂如_二雷驚_一蟄也。而無味之談、如_二砒霜_一如_二狼毒_一。是故無_二人能下_一舌頭_二宜乎_一。此録久絶_二流行_一。或云、今也宗風日起、不_レ乏_二其人_一、若下_二疏決手_一、試令_二「翻刻」_一、不但開公法身之設利羅重放_二不朽之大光明_一、抑亦有_下知_二「毒用」者_上、必能瘳_二「瞑眩疾」_一。其久絶_二流行_一者、原泉之盈_下科也。既盈而後進、今正其時也。予聞_二緒言_一而喜、乃乾竹絞_二汁_一、瀝_二「這些一滴」_一、擲_二「擲授」_一印生、以一_下任落_二「江湖」_一放_中乎四海_上。若有_レ人道_二「千里烏騾追不_レ得、則

幸也。(曹全語録二・五七八a~b)

として載せられており、ここではなぜか跋文ではなく「無門禪師語録序」として扱われている。嗣法門人白龍撰『鷹峯和尚年譜』の「(元禄)五年壬申」の箇所(曹全語録二・九二八b)には『無門開和尚語録』に関する記載などはない。

(7) 法燈派の峻翁令山(法光円融禪師、一三四四—一四〇八)には伝記史料として『名僧行録』第二冊上「峻翁山和尚行録」が存し、『禪林諸祖行狀』第五冊にも同内容の「広園開山峻翁山和尚行録」が収められており、詳しい事跡が伝えられている。

(8) 慧開より若干ながら後輩に嗣承未詳の石門□開という禪者が存しており、大慧派の無文道璨(柳塘、一二二四—一二七二)の『無文印』巻一四「雜著」の「送_三乘月洲帰_二九江_一序」には「余友開石門・源靈叟皆亟称_レ之」とあり、同じく『無文印』巻八「序」の「送_三然松麓帰_二南嶽_一序」にも「于_三天開図画者_一、有_二開石門_一、有_二康南翁_一。俛仰三年、石門死、南翁死」と記されている。石門□開の場合、無門慧開と同じく門と開が道号と法諱に使われており、この人は道璨のほかに破庵派無準下の靈叟道源と松麓可然、破庵派石田下の南翁□康、嗣承未詳の月洲□乗らと関わりを持っており、道璨より先に示寂していることが判明する。

(9) 明末清初に曹洞正宗の永覚元賢(一五七八—一六五七)が編した駒澤大学図書館所蔵『鼓山志』巻三「開士志」によれば、

無門慧開の生涯と『無門関』(一)(佐藤)

福州閩県の鼓山湧泉禪寺の第四九代住持を勤めた破庵派の無関普門(字は円証、?—一二六二)について、

第四九代無関禪師、諱普門、字円証。明州慈谿人、姓夏氏。年二十一、得_二度于婺州中峯靖禪師_一。後参_三径山無準禪師_一、克_二藏主_一、因而嗣_レ焉。初出_二世杭州石室_一、次住_二白雲・盤山・常樂_一、又開_二山寿国_一。宝祐五年丁巳、大帥史端明、請住_二当山_一。辛酉謝_レ事。壬戌六月告_レ寂。葬_二于牛坑瑞巖塔旁_一。と伝えており、事跡が簡略に知られる。この人は法諱が普門であり、道号を無関、字を円証と称している。明州慈谿県の夏氏の出身で、二一歳のとき婺州(浙江省)の中峯□靖のもとで剃髮得度している。その後、杭州径山に上つて破庵派の無準師範に参じ、藏主を務めて法を嗣いでいる。最初に杭州の石室に出世開堂したとされるが、ついで歴住した白雲・盤山・常樂の三カ寺についても定かでない。また普門は寿国寺の開山となっているが、この寺は明州慈谿県内に創建された寿国禪寺と見られ、大慧派の夢窓嗣清や虎丘派の龍源介清(仏海性空禪師、一二三九—一三〇一)が住持した四明の寿国禪寺と同一の寺院を指しているであろう。宝祐五年(一二五七)に大師の史端明の招請によつて普門は鼓山の住持に就任しており、五年間にわたり住持を勤めている。景定二年(一二六二)に住持職を謝し、景定三年(一二六二)六月に示寂しており、普門の遺骨は鼓山山中の牛坑の瑞巖塔の傍らに葬られている。したがって、普門

は無門慧開とほぼ同世代を生きたことが知られ、慧開に遅れること僅か二年を経て示寂している。『物初賸語』卷二に「無関序」が存しており、道号と法諱から無関門あるいは門無関と称されていたことになろう。

（10）聖一派の無関玄悟（普門房）については、『禅林僧伝』第四冊と『本朝僧宝伝』巻上などに嗣法門人の巖寶明投が撰した「日本国五山之上瑞龍山南禅寺開山大明国師行状」が存しており、『禅林僧伝』第四冊と『禅林諸祖伝』第一〇冊と『禅林諸祖行状』第四冊と『統群書類従』第九輯上などには松源派（金剛幢下）の椿庭海寿（木杯道人、一三二八—一四〇一）が撰した「大日本国皇城東五山之上瑞龍山太平興国南禅寺開山第一世祖仏心禅師大明国師無関大和尚塔銘」が存している。また建仁寺両足院には江戸期に夢窓派の梅莊顯常（大典、一六三四—一七一六）が撰した「龍吟開山仏心大明国師靈光塔碑銘」も伝えられている。

（11）良渚とは杭州市西北に位置する餘杭区良渚鎮のことであり、現今では古く長江文明における新石器時代後期の良渚文化が栄えた地として著名である。『咸淳臨安志』や『咸淳臨安志』卷二〇「疆域五」の「郷里」では「錢塘県管十三郷」の「靈芝郷管里五」に「梁渚・筍山・前梁・後梁・胡林」とあり、錢塘県靈芝郷の梁渚とあるのが良渚を指している。古く良渚は餘杭県ではなく錢塘県に属していたことになろう。

（12）『仏祖統紀』巻首「叙古製」には「理宗嘉熙初、錢唐良渚鑑法師、取吳本放史法、為本紀世家列伝載記諸志、仍旧名曰『釈門正統』」（正統蔵一三一・三a）と記されているから、『釈門正統』八巻を著した宗鑑が杭州錢塘良渚の人で、禅僧ではなく教僧ないし法師であつたことが確認される。

（13）『祖堂集』卷一七「天龍和尚」の章では単に「天龍和尚、嗣大梅。未親行録、不決化縁始終」（中文本・三三三a）と記されるのみであるが、『祖堂集』卷一九「俱胝和尚」の章には「俱胝和尚、嗣天龍。在敬安州。未親行録、不決始終。師因住庵時、有尼衆名實際、戴笠子執錫、遶師三匝、卓錫前立、問師曰、和尚若答、某甲則下笠子。師無對。其尼便発去。師云、日勢已晚、且止一宿。尼云、若答得則宿、若答不得則進前行。師歎曰、我是沙門、被尼衆所笑、濫処丈夫之形、而無丈夫之用、欲出山參尋知識。宴座之中、忽然神人報言、三五日間、有大菩薩人到來、為和尚說法。未逾旬日、天龍和尚到來。師接足前迎。侍立之次、具陳上事、未審如何對他。天龍豎起一指。師當時大悟。後來為衆云、某甲得天龍和尚一指禅、一生用不尽」（中文本・三六八a、b）とある。なお、敬安州とは婺州の誤りである。

（14）清代の康熙五十七年（一七一八）に刊行された『康熙錢塘県志』卷一四「寺觀」でも、

天龍寺、在龍山陽。宋乾德三年、吳越王建。大中祥符元

年、改_二名感業_一。今仍旧名。内有_一鳳松樓木觀音像_一、建炎間兵燬不_レ壞。歲久寺圯、元延祐間重建。有_二徐一夔記_一。

と簡略に記されており、天龍寺が杭州錢塘県の龍山の陽に存することが知られる。

(15) 『祖堂集』卷一〇「鏡清和尚」の章には、天龍寺に關して「旋_二廻東越_一、初住_二鏡清_一、後居_二天龍_一・龍冊」。錢王欽仰_二德高_一、賜_二紫衣法号順德大師_一」(中文本・一九四b)と記すにすぎない。

(16) 『景德伝燈録』卷二一「杭州天龍寺重機明真大師」の章には、杭州天龍寺重機、明真大師。台州黃巖人也。自_二玄沙得_レ法、迴入_二浙中_一、錢武肅王請說法住持。(大正藏五一・三七二c)

とあり、重機が錢鏐(字は具美、武肅王、八五二―九三三)の請を受けて天龍寺に住持したことが知られ、明真大師の号も呉越王錢鏐から賜つたものと見られる。また『景德伝燈録』卷二四「杭州天龍寺秀禪師」の章には、

杭州天龍寺秀禪師、先住_二歲豐_一。(中略)本国署_二清慧大師_一。(大正藏五一・四〇一a・b)

とあるから、天龍□秀は北宋初期まで活動し、宋朝(本国)から清慧大師の勅号を得ていることが知られる。

(17) 『康熙錢塘県志』卷一四「寺觀」の「天龍寺」の項には「元徐一夔記畧」として、

杭天龍寺、在_二慈雲嶺之陽_一、後挹_二龍山_一、前挹_二浙江_一、幽復瀟灑。唐真覺禪師、始建_二道場_一。碑刻墜軼、莫_レ考_二其歲月_一。

無門慧開の生涯と『無門関』(一) (佐藤)

錢武肅王、時欲_レ広_二禪會_一、乃新_二茲寺_一、以居_二鏡清禪師_一。其後明真機・清惠秀、皆以_二名德_一相繼、僧史書_二之_一。宋大中祥符三年、改_二額感業_一、以_二甲乙_一伝。次建炎三年燬_二於兵_一、惟木觀音像在。紹興十三年、建_二圓壇_一、以_二淨明寺_一為_二齋宮_一。泰定三年、遷_二寺於旧基之東若干步_一。即宋郊祀時、侍從齋宿地也。高爽彝曠、得_二江山之勝_一、乃作_二大殿・仏閣・僧堂・翼以_二兩廡_一、蔽以_二三門_一。以及_二庫庖漏閣_一、与_二法所_一宜有_二者_一、莫_レ不_二修具_一。訖_二工於至正三年冬_一。

とあり、元代に徐一夔(字は大章、?―一四〇〇)が天龍寺の歴史の変遷について概説している。実際に徐一夔の『始豐藁』卷七「記」には「龍山天龍寺記」が載せられており、

余聞、仏在_二舍衛國_一説_二法度_一衆、一時弟子受_二持其説_一者、亡慮千数百人、凡其宮室之奉_二飲食器物之需_一其費、蓋亦夥矣。然皆出_二於檀那之施_一。予及凡比邱衆乞取以給。夫所謂比邱云者、猶_二中國之言_一乞士也。其法以乞有_二二、善_一其德足_二以贍_一衆一也、其心降伏無_二驕矜之氣_一可_二以向_レ道_一二也。自_二凡情_一言_二之乞_一取于人、則不_レ免有_二恥辱之心_一、而仏方頼以濟_二其大事因縁_一、其意不_二亦深且遠_一哉。觀_二今仏氏闡化之郷_一、若_二杭之天龍寺_一、其祖師之建置、殆有_二合_二于仏之本意_一。寺在_二慈雲嶺之陽_一、後据_二龍山_一、前挹_二浙江_一、幽復瀟灑。唐真覺禪師、卓錫于此、始建_二道場_一、碑刻墜軼、莫_レ從考_二其歲月_一。錢武肅王時、欲_レ広_二禪舍_一、乃新_二茲寺_一、以居_二鏡清

禪師。其後明真機・清惠秀、皆以名德相繼、僧史書之。宋大中祥符三年、改寺額為感業、以甲乙二伝。次建炎三年燬于兵、惟木觀音像在。紹興十三年建園壇、以淨明寺為齋宮。寺隣淨明、歲時侍從齋宿。僧徒勿便多散処它処、寺亦日入于廢。元延祐間、有大道平師、族出漁浦、嘗往天目山謁幼住禪師、咨叩心要。禪師見其有道氣、謂曰、天龍古刹、爾往興之、以振祖道。師遂抵茲寺、礼慶庵古為師、精修苦行、夜禪昼誦、已則誅鋤茅草、畚除瓦礫、因復旧觀。久之、緇白向風而至。時千巖長公居龍華寺、嘉師之為命。其徒守貴來協贊、乃哀衆施。以泰定三年、遷寺于旧基之東若干步、即宋郊祀時、侍從齋宿地也。高爽夷曠、得江山之勝。乃首作大殿、次作仏閣、次作僧堂、翼以兩廡、蔽以三門、以及庫湏園庖、与凡法所宜有者、莫不備具。而貴協贊之力居多、迄于至正三年之冬。茲寺久廢、一旦棟宇嶙峋、金碧煥爛。四方衲子、涉浙而西東者踵至、至則如歸、莫不頌師重興之功。師乃揭誓楹間曰、瞻衆之計、遵如来遺教、惟持鉢化緣以充、不置恒産。至于住持必選宗門上首、徒衆必納諸方學者。有違此盟、仏天是鑒著為成規。師既化去、嗣主寺事者、守其成規、弗替法杜之盛如初。故吾以謂、有合于仏之本意者以此。今住山行滿、既加塗墍藻績、寺視旧益新。乃集其衆議

曰、前人之建置、蓋不易矣。不有登載、何以攷見始末。遂來請記、嗟乎異時、南北兩山、禪覺教苑相望、重樓傑閣、穹檐輿宇、侵雲蔽日、珠纓宝鬘、名香異花、飄風歎霧、長夏永日、撞鐘擊鼓、袍履雲会、莊嚴富貴、号称化城。夫何八千界内、不免三番之厄歟焉。為墟過者、為之慨歎。天龍僻在一隅、當兩山盛時、取名位者、階級所不齒、務游覽者、心跡所不到。較其勢、固不能与之埒也。今也乃能涉劫以長存、其故何哉。亦惟師之宏願有以維持之、至于永久。爾如仏所說以世間相為非常住、必尽空諸有、至于無而後、已則夫莊嚴富貴、為空花、為幻泡、固不必妄加計較。而世俗之見、喜成而悲壞、有如天龍之殊勝、夫寧不為之生歡喜而加讚歎哉。故吾亦樂為述三寺所由始、并著師之功、以副滿之請。且使來者有所考見云。

と記されている。無門慧開に関する記事は見られないものの、唐末五代の天龍真覺や鏡清道愆と天龍寺のこと、北宋代から南宋代における天龍寺伽藍や住持の変遷、さらに破菴派（幻住派）の大道善平や千巖元長および無用守貴らによって元代後期に復興された天龍寺の状況などが伝えられている。

(18)『宋文憲公護法録』卷五「記」の「叢桂樓記」に「叢桂樓在杭州天龍寺之左偏、主僧大道禪師作之。大道、諱善平、越漁浦人」とあるから、このときの住持が大道善平であったことが知

られる。同じく『宋文憲公護法錄』卷五「記」には「杭州天龍寺石仏記」も載せられている。

(19) このほかにも『増集統伝燈錄』卷五「北京順天府慶寿独庵道衍禪師」の章に「初出^二世臨安普慶^一、遷^三住杭之天龍・嘉定之留光^一。洪武壬戌、僧録司選奉、欽除^三慶寿住持^一」(正統藏一四二・四三五d)と記されているから、還俗して明朝に仕えた姚広孝すなわち独庵道衍(斯道、一三三五—一四一八)も早い頃に杭州天龍寺に住持していることが知られる。

(20) 『月林觀和尚語錄』一卷一冊は鎌倉市山之内の松ヶ岡文庫に所蔵されており、京都大学図書館にも写本が所蔵されている。『月林觀和尚語錄』の編成を示すならば、つぎのようになってい

三山陳貴謙益文書(序文)

月林和尚住平江府蠡口聖因禪院語錄 侍者法宝編

住平江府承天能仁禪寺語錄 侍者法璫編

住平江府万寿報恩光孝禪寺語錄 侍者慶会編

住臨安府崇孝顯親禪寺語錄 侍者法清編

開山湖州報因佑慈禪寺語錄 侍者有宗編

住平江府靈巖山崇報禪寺語錄 侍者惟珪編

住臨安府西湖澄翠庵語錄 侍者道果編

住湖州烏回山密嚴禪寺語錄 侍者恵開編

頌古 侍者徳秀編

讃仏祖・小仏事・偈頌

無門慧開の生涯と『無門関』(一) (佐藤)

澄翠庵月林老僧師觀書付天平方丈孤峯長老
體道銘・陳貴謙撰祭文

月林觀禪師塔銘 陳貴謙撰

三山陳貴謙益文撰敬賛 嘉定一〇年俗仏日
平江承天鉄鞭元韶跋 嘉定一〇年一〇月

この『月林觀和尚語錄』の編者には元溪惟珪・無門慧開(恵開・孤峰徳秀など後に法嗣として活躍した禪者も含まれている。また跋文を寄せた鉄鞭允韶(元韶とも)は虎丘派の密庵咸傑(一一八一—一一八六)の高弟であり、この跋文によつて嘉定一〇年(一二一七)の頃に蘇州平江府呉県の承天能仁禪寺で住持を勤めていたことが知られる。

(21) 『枯崖和尚漫録』卷中「国史陳公貴謙」の項に、

国史陳公貴謙、嘗在^二烏回^一、与^二月林觀禪師^一夜坐。林曰、如何是實中主。公曰、頭腦相似。林曰、如何是主中實。公曰、横按^二鎖鐙^一行^三正令^一、太平寶宇斬^二癡頑^一。復隨^レ声曰、如何是實中實。月林搖^レ手而笑。噫公之機辯、猶可^二想見^一也。(正統藏一四八・八六a)

という湖州烏回寺で師觀と交わした實主問答を記しており、師觀が陳貴謙の機辯に満ちた答えに満足したさまを伝えている。

(22) 楼鑰の『攻媿集』卷一〇「塔銘」に載る「雪竇足菴禪師塔銘」につぎのように記されている。

十一年、雪竇虚^レ席、衆皆以^レ師為^レ請。師念^二明覺・知覺道

場、勉^レ為^レ起^レ魔。一住八載、所在道俗帰仰、至^レ是尤盛。随^レ力葺理、内外一新。

足庵智鑑は宏智派の自得慧暉の後席を継いで淳熙十一年（一一八四）に雪竇山に住持しており、八年間にわたって住持を勤めて伽藍などを修理一新したとされるから、紹熙二年（一一九一）に住持職を退いたことが知られる。如浄が淳熙七年（一一八〇）に一九歳で雪竇山に上山し、その後に住持となった智鑑に随侍していたのであれば、当然のことながら、智鑑のもとで首座を勤めた月林師観のことを見知っていたと解される。

(23) 周必大の『周文忠集』巻八〇（『平園統稿』巻四〇）の「道釈〔塔銘〕」に載る「圓鑑塔銘」（『明州阿育王山統志』巻一では「佛照光禪師塔銘」）につきのように記されている。

七年夏、上用^下仁宗侍^二大覚禪師懷瑾^一故事^上、亦以育王処^レ之。逮^レ移、御重華趣令^二入觀、漏下十刻乃退。紹熙四年、改蒞^二徑山。師力辞。孝宗曰、欲^二時相見^一耳。

拙庵德光は淳熙七年（一一八〇）夏に大慧派の普門從廓（妙智禪師、一一一九—一一八〇）の後席を継いで阿育王山に住持しており、一四年間にわたって化導を敷いた後、紹熙四年（一一九三）に至って孝宗の請によって徑山に勅住している。

(24) 東福円爾が請求した『宗派図』（『禪宗伝法宗派図』とも）には開福道寧の系統は記されておらず、「円悟勤禪師」「此菴元禪師」「或菴休禪師」と嗣承する「無際修禪師」の法嗣として「月

林観禪師」の名を載せている。「無際修禪師」とは楊岐派の或庵師体（一一〇八—一一七九）の法を嗣いだ無証了修（無際は誤り）のことであり、了修は蘇州呉県の万寿報恩光孝禪寺に住持したことが知られる。「月林観禪師塔銘」によれば、かつて師観は万寿寺の了修のもとで首座として分座説法しているから、一に了修の法嗣のごとく見られたものであろう。

(25) 雪屋正韶については、佐藤秀孝「雪屋正韶と廬山天池寺―天童如浄が晩年に道元とともに育成した嗣法門人―」（『愛知学院大学禅研究所紀要』第三九号、平成二三年三月三一日）と同「雪屋正韶と廬山天池寺―天童如浄の法を嗣いで同調せず―」（『曹洞宗総合研究センター』『學術大会紀要』第二二回、平成二三年七月一日）を参照。

(26) 『月林観和尚語録』の侍者恵開編「住湖州烏回山密嚴禪寺語録」には「上堂」「施主設^レ粥開^レ浴請上堂」「除夜小参」「上堂」「上堂」「上堂」「上堂」「十三日参前入室罷就^レ座」（『正統藏』二〇・二四六b-c）を収めており、師観は「烏回」と自称している。

(27) 佐藤秀孝「一山一寧の伝記史料―虎関師鍊撰『一山国師行状』の訳註―」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第七五号、平成二九年三月）の「浮山鴻福寺の無等恵融と俗叔の靈江智月」の箇所を参照。

(28) 『無文印』巻五「塔銘」に載る「石霜竹巖印禪師塔銘」の全文

を掲載するならば、つぎのようである。

石霜竹巖印禪師塔銘。

昔東山以_二白雲之道、陶_二治天下學者。開福寧、實捷_二出其間、沈潛博約、所_レ挾不_レ下_二三仏。而枯瘁寒瘠、剥_二落華滋、如_二冬在_二木杪。老拳謹握、忍_レ死不_二輕售。密語_二円悟、以付_二月菴果、再伝而月林覲出、以_レ行配_二道。方行_二吳越間。開福之門、益大以肆。石霜竹巖師、其嫡也。

師諱妙印、豫章進賢萬氏子。無_二適_二俗韻、受_二僧學於邑之龍塘紹曇。年十六受_二僧服、杖_二策行_二四方。時去_二乾淳未_二遠、江浙多_二名老宿。歷扣_二其廬、留_二龍門光・癡鈍穎・浙翁琰會_二最久。用_レ心良苦、而不_レ遂_二其大欲。乃見_二月林于平江靈巖。於_二入室次、月林問、如何是祖師西來意。師答曰、直_二甚破燈盞。月林可_二其言、而奇_二其器。朝煨夕煉、異時所_レ得尺短寸長、悉亡去無_二影像、載_二道而帰。無_二二月住_二高臺、致_二師分座。已而復首_二衆巖麓。舍人張公嗣古、以_二長沙谷山_二請_二出世。劬_レ躬苦_レ節、有_二古住山人風味。六年、侍郎余公嶠、遷_二之石霜。湖南自_二無_二散_二席、衲子俚俚無_二所_二帰宿。至_レ是雲集如_二水赴_レ壑。未_レ幾、建之開元、瑞之黃蘗、南嶽之福巖、洪之翠巖・宝峯、聘命交至。率謝不_レ往、徙_二高安洞山、行_二道如_二石霜時。樞相賈公似道鎮_二九江、虛_二東林、屈_レ師為_二廬山重。師入院、不_二兩月即去、帰臥_二旧業。僉樞陳公韓守_レ潭、首以_二龍牙_二起_レ師、未_レ領_二事易_二石

無門慧開の生涯と『無門関』(一) (佐藤)

霜。法道復大振。長松片石、皆長_二顔色。尽_レ發_二所_二積、築_二菴曰_二紫霞、為_二藏焉休焉之地。侍郎湯公中、為_二之記。時丞相趙公葵、燕_二居里第、招_レ師論_二道無_二虛月。宝祐二年秋、退_二居紫霞。明年示_レ疾、手書_二四句偈云、六十九年、一場大夢、歸去來兮、珍重珍重。實八月二十三日。茶毘、牙齒數珠不_レ壞。舍利陸離、五色相激射。塔_二于紫霞菴側。度_二小師、四十餘輩。其徒惠隆、以_二師四會語、走_二數千里、求_二校於雪竇西江。復來_二番、請_二余銘。余周_二旋諸老間、竊聞_二議論。謂、月林制行純白、視_二天地万物皆自己、思_二天下之人一夫不_レ聞_二道、猶_二己負_レ之、故善巧方便、誘_レ之趣入。而皆粹然一出_二於誠。其徒未_レ得_二其真、取_二其似_二焉者、嚼_レ飯餒_レ嬰、伊阿煦嫗、如_二田翁村媼、謂_二是足_二以_二尽_二先師之道。或者反_レ是則曰、身不_二必修、行不_二必果、理欲界限不_二必嚴。誑言偽行、於_二其師之道、不_二啻如_二氷炭、師於_二二家、無_レ所_二依違、謂天下無_二事外之理。住山二十年、所至一日必葺。而不_レ廢_二倡_二道、非_レ不_レ慈也。而斷_レ之以_レ義、非_レ不_レ善誘_二也。而臨_レ之以_レ正。機之峻而發_二於用一也、大行之力而倍_二於人一也深。此其真得_二月林之心_二歟。數十年來、二浙無_二江西尊宿。余遊_二京師、屢以_二師道望、白_二之有位者、方將_二令行_二吳越。而師則滅矣、悲夫。銘曰、道若_二大路、孔平且直。躬行實踐、無_レ往弗_レ獲。發為_二機用、如_二劍斯割。溢為_二棒喝、如_二電斯激。

厥維伊何、躬行之力。彼昏不_レ知、以_レ舌為_レ的。
身違行戾、舞_レ誑肆_レ惑。竹巖曰噫、其究_二安宅_一。

持_レ規挈_レ矩、尊_レ道崇_レ德。泣_レ衆行_レ己、如_レ臨_二萬敵_一。

矯矯_一節、始終不_レ易。後五百世、古道顔色。

於_二月林門_一、一直_二千百_一。用不_二尽究_一、施則無_レ極。

謂_二余不_レ信、有_二如_レ此石_一。

妙印には四会語が存したというから、表題は『竹巖和尚語録』であつたと思われ、明州奉化県の雪竇山資聖禪寺の住持であつた楊岐派の西江広謀が妙印の門人である惠隆の請で語録の校勘をなしたことが記されている。おそらく『竹巖和尚語録』には師観や慧開らとの関わりを伝える貴重な記事も多く存したことであろう。

(29) 『増集統伝燈録』の編者である南石文琇は、明らかに『無門開和尚語録』の記載内容を直に閲覧した上で、慧開が如何なる機縁で悟道したのかを「告香普説」や「偈頌」を通してまとめていると見てよい。

(30) 『咸淳臨安志』卷七九「寺観五」の「自涌金門外至銭湖門」に杭州銭塘県の昭慶律寺について、

大昭慶寺。乾德五年錢氏建、旧名_二菩提_一。太平興国七年、改賜_二今額_一。太平興国三年、建_二戒壇_一。天禧中、円浄大師剏_二白蓮社_一。有_二堂_一二「曰_二緑野_一」曰_二白蓮_一。軒_二曰_二碧玉_一曰_二四観_一。古刻有_二「白蓮堂詩・蓮社詩・文殊頌・入社詩・真悟律師行業

記・菩提寺記」、皆燬_二於火_一。南渡初、以_二其地_一為_二策選鋒軍教場_一、惟存_二戒壇數間_一而已。自_二嘉定_一至_二宝慶初_一、漸復_二旧観_一。

と記されており、この寺の変遷が知られる。昭慶律寺は北宋代に盛えて戒壇や諸堂宇も存したが、火災後、南宋初期には軍の施設となっていたようであり、宝慶年間（一二二五—一二二七）の初めに至つて旧観に復したとされる。

(31) 『無門開和尚語録』「偈頌」につぎの偈頌が残されている。

師在_二南高峰石室中_一出_レ定作。

静処乾坤窄、閑居日月忙、虚空即妙体、独露_二法中王_一。（卅統藏一二〇・二六二c—d）

この偈頌は慧開が杭州の靈隠山の南高峰の石室で禪定を終えたときに詠じた作であるらしいが、当時の慧開が天龍庵に閑居していたときの心境を伝えるものであろうか。

(32) 湖州の烏回山密嚴禪寺に住持した禪者としては『嘉泰普燈録』卷一二「慶元府啓霞德宏禪師」の章に「出_二世烏回_一、次遷_二啓霞_一」（卅統藏一三七・九七b）とあり、同じ「嘉泰普燈録」卷一三「湖州烏回唯庵範禪師」の章（卅統藏一三七・一〇五c）や『五燈会元』卷一八「安吉州烏回唯庵良範禪師」の章（卅統藏一三八・三五八a）が存することから、黄龍派の啓霞德宏や唯庵良範らが北宋末期から南宋初期にかけて住持した事実が知られる。『古林和尚拾遺偈頌』巻下に「釈烏回別流寄_二希白_一「偈四首」と題

する偈頌（正統蔵一二三・二七八a-b）が存するから、破庵派の別流□涇が元代中期に住持したことが知られる。また『笑隠訢禪師語録』巻一には門人廷俊等編「湖州路烏回禪寺語録」（正統蔵一二一・一〇一d-一〇二d）が存しているから、元代後期には大慧派の笑隠大訢（蒲室、広智全悟大禪師、一二八四—一三四四）も住持している。

（33）道光九年（一八二九）に刊行された『武康県志』には上栢山の報因寺に關しては何ら記載が見られないが、同巻四「市巷」に「上栢鎮、在_二県南十三里、栢山上游地勢高仰因名。埠上有_二湘溪_一、溪上有_二望仙橋_一」とあり、「下栢鎮、在_二県南十五里、栢山下游故名」があるから、武康県南一三里的上栢鎮の近隣に上栢山が存するものであるうか。

（34）慈懿皇后については『宋史』卷二四三「后妃下」に「光宗慈懿李皇后」として伝が存するほか、『宋会要輯稿』「建炎以来朝野雜記」などにも記事が見られる。

（35）湖州武康県の上栢は隱山閑居の地としても知られたようである。『物初賡語』卷二四「行状」の「笑翁禪師行状」に「王薨、師亦退菴_二于上栢_一而思_レ隱」とあり、大慧派の笑翁妙堪（一一七七—一二四八）が宰相の史彌遠（字は同叔、一一六四—一二二三）が逝去した際にしばらく上栢の地に閑居していることが知られる。また虞集の『道園学古録』卷四九「銘」の「断崖和尚塔銘」や『補統高僧伝』卷一三「天目断崖禪師」の章にも「遂

歸_二德清_一、其母為_二壳_一簪珥_一、同入_二武康上栢山_一、結茅以居。人見_二其混_レ俗、罔_レ測_二其意_一」（正統蔵一三四・一一五b）とあり、元代に破庵派の断崖了義（仏慧円明正覚普度大師、一二六三—一三三四）がやはり湖州武康県の上栢山に閑居している。

（36）入矢義高監修『玄沙広録（中）』（筑摩書房）では、この一文を「仏道はからりとして廣大、そこに道程はない。またその道には関門はないが、それが実は解脱への門なのであり、道を行くという思いのないのが、実はその道を行ずる人の思いなのだ。その道は時間の枠を超えているので、盛衰浮沈するはずもない。だからそれを理念として措定すれば、真実からはずれることになる。そもそも人為とは無縁だからである」（一二四頁）と訳している。

（37）『中国仏寺誌叢刊』第九二冊に清代編集『江心志』一〇巻が所収されており、同巻一〇「祖系」などから、南宋後期に松源派の石巖希理や大慧派の笑翁妙堪（一一七七—一二四八）・淮海元肇（一一八九—一二六五）および虎丘派の寂窓有照などが住持したことが知られるが、慧開が到った紹定元年（一二二八）の当時、具体的に如何なる禪者が住持であったのは定かでない。

（38）『無門関』の冒頭（大正蔵四八・二九二a-b）には陳垣（習菴、一一九七—一二四一）が記した序文として、

說道「無門」、尽大地人得入。說道「有門」、無_二阿師分_一。第一強添「幾箇注脚」、大似「笠上頂_レ笠」。硬要「習翁贊揚」、又是乾

竹紋^レ汁。著^二得^一這些^レ哮喘^一、不^レ消^二習^一翁一擲。一擲莫^レ教^二三滴落^一江湖^一、千里烏^レ馳追不^レ得。

紹定改元七月晦、習菴陳頃写。

とあり、紹定元年（一二二八）七月晦日の日付が存しているが、慧開と陳頃に如何なる交流が存したのかは定かでない。『宋史』卷四二三（列伝一八二）に「陳頃」として伝記が存している。

（39）椎名宏雄編『五山版中国禅籍叢刊（第五卷綱要・清規）』に大東急記念文庫所蔵の五山版『無量寿禅师日用清規』一卷を収めており、これは泰定四年（一二二七）二月八日（仏成道日）に黄龍山の普寂が跋文を寄せて重刊された際に付されたものである。また石井修道「真福寺所蔵『入衆日用』について」（『駒澤大学禅研究所年報』第二五号、平成二五年二月）の論考も存している。

（40）大慧派の秀巖師瑞については『宝慶四明志』卷九「叙人中」に「僧師瑞」として比較的に詳しい伝記が存し、師瑞が本師の拙庵徳光を助化して明州鄞県の阿育王山広利禅寺で住持を勤めたことが特筆されている。日本の南北朝期に刊行された『仏祖正伝宗派図』によれば「育王秀巖師瑞」の法嗣として「毒地□一」「鉄脚□清」「円通枯山良傳」「瑞巖無量崇寿」の四人を載せている。ここでは宗寿ではなく崇寿と記されており、また同門の枯山良傳とは一に日本の道元が在宋中に知遇を得た傳蔵主ではないかとも推測される。

（41）『嘉定赤城志』卷二八「寺観門二（寺院）」の「黄巖（禅院）」に、台州瑞巖寺の変遷をつぎのように伝えている。

瑞巖浄土寺、在^二三県西北四十五里^一。唐景福初、僧師彦建。或云^二唐大順二年^一、或又云^二文德初建^一。其山石皆紫色。乾德二年、賜^二名瑞巖^一。僧懷玉・智顗皆嘗棲^レ焉。国朝祥符元年、改^二今額^一。乾道中、錢參政端礼、家乞^二為^一香燈院、賜^二名移忠昭慶^一。後其孫丞相象祖、還^二諸朝^一復^二今額^一。

開山は唐末五代に活躍した青原下の瑞巖師彦（空照禅师）であり、南宋代には参政の錢端礼（字は処和、松窗道人、一一〇九—一一七七）や丞相の錢象祖（字は同伯、号は止安、一一四五—一二二一）が檀越として関わっている。

（42）道元の正師である如浄の場合には『如浄和尚語録』に「台州瑞岩禅寺語録」（大正蔵四八・一二五c—一二六a）と「明州瑞岩語録」（大正蔵四八・一二五c—一二六a）が存するから、台州黄巖県の瑞巖浄土禅院と明州定海県の瑞巖開善禅寺の二ヶ寺の瑞巖寺に住持していることが知られる。また興味深いのは『無文和尚語録』「題跋」に「跋^二天童浄和尚・寿無量墨跡^一」と題して、無量拳頭能殺而不^レ能^レ活、天童拳頭能活而不^レ能^レ殺。問雲親中^二老之毒^一、山河大地草木叢林、至^レ今忍痛未^レ已也。虚空露露未^レ嘗不^レ殷^二然天地間^一。雅維那於^二展卷處^一、忽然轟^二入^一罽縷、政恐不^レ及^二掩^一耳。（已統蔵一五〇・五一〇d）という如浄と宗寿の墨蹟に寄せた跋文が存していることである。

この跋文では宗寿が天童山の如浄と比較されており、間雲という禅者が如浄・宗寿の両者に参学してその毒氣に当てられた点を無文道璨は強調している。

〈キーワード〉 無門慧開、『無門関』、『無門開和尚語録』、杭州天龍寺、月林師観、趙州無字、無量宗寿